

第2章 本市の地域特性と予想される災害

2-1 地域特性

本市は、地理的な要因から自然災害を受けやすい立地条件にあり、静岡県第4次地震被害想定や稲生沢川洪水浸水想定、土砂災害警戒区域等で示されているように、市内の多くの地域で被害が発生するおそれがある。

特に、沿岸部の限られた平坦地を中心に居住地域や工業・商業地域などが形成されているため、津波・高潮等への対応には大きな課題を抱えているが、その周囲を山々に囲まれていることから、高台移転による対応も難しい状況にある。また、木造住宅が密集する市街地においては高齢化が進行しており、高齢者を始めとした居住者の災害時の避難には課題がある。さらに、地震時には液状化に伴う噴砂・噴水、地盤の軟弱化などの地盤変形に注意をする必要がある。

その他、本市は、国道414号、国道135号、国道136号、市道敷根1号線等の基幹的交通インフラが整備されているが、津波による被害が想定される沿岸部を始め、大規模災害時により、これらの基幹的交通インフラの機能が停止し、復旧までに相当な時間を要する事態が予想されている。現在、伊豆縦貫自動車の整備等の取組が進められているが、整備は長期に及ぶ見通しとなっている。

以下に本市の地域特性を示す。

(1) 地勢

本市は、静岡県の東南部、伊豆半島の南部東側に位置し、天城山系の南端から太平洋に至る豊かな自然に恵まれた都市である。市域は東西13.0km、南北16.0km、面積は104.38km²の広がりを持ち、海拔2.5m（市役所）となっている。

市域は、総面積のうち約77%が山林・原野、約10%が田畑・宅地、約13%が雑種地その他と、市域のほとんどが森林で占められており、平坦な土地は極めて限られている。

(2) 地形と地質

ア 地形の概要

本市の地形は、大中小の起伏山地と河川沿岸流域に形成された谷底平野、須崎や白浜等の台地及び丘陵地に大きく区分される。

水系は、稲生沢川水系と大賀茂川水系に大別される。そのほか、丘陵地を源とする

小河川が多数流れている。稲梓の山に源を発する稲生沢川（流路延長15.1km）は上流で二つに分かれているが、椎原で本流となり、本市の中心部を縦貫しながら南下し、下田湾に流出している。本流域の東側には、須崎半島とこれに連なる海岸線、西側には上流を大賀茂に発し吉佐美の浜に注ぐ小規模ながら格子状の流路をとっている大賀茂川（流路延長4.5km）と、さらにその西側には田牛川（流路延長3.0km）及びこれに連なる海岸線によって占められている。

イ 地質（新南豆風土誌より）

稲生沢を中心とする湯ヶ島層群と、大賀茂川流域を中心とする南伊豆層群及び須崎半島から東海岸に連なる白浜層群の三層群に大別することができる。

（３） 気候

本市の気候は、近海を北上する黒潮の影響により年平均17℃程度と全般に温暖であり、降水量が年間1,900mmを超える。このように植物の成育に適した気候条件を有するため温帯系の広葉樹や針葉樹、亜熱帯系の植物も自生し、四季を通じて多様な草花や果実が成育しており自然の生産力に極めて恵まれた地域となっている。

風は、年間平均風速が4.5m/s（石廊崎特別地域気象観測所による。以降の観測値も同様）となっており、過去の日最大風速は、昭和34（1959）年8月14日に観測された東の風48.8m/sが最も強く、最近10年間の日最大風速は、平成30（2018）年7月28日の33.0m/sで、これは東北東の風であった。過去の最大瞬間風速で最も強かったのは、平成16（2004）年10月9日の67.6m/sで、これも東北東の風であった。

降水量は、5～10月にかけて月間降水量が約200mm以上となることもあるが、冬期は少ない。

2-2 予想される災害リスク

予想される災害について、下田市地域防災計画（共通対策編）より整理する。

（１） 地震、津波

伊豆地方は、有史以来たびたび地震・津波の災害に見舞われている。本市における近年の大震災としては、昭和19（1944）年の東南海地震（マグニチュード7.9）、昭和49（1974）年の伊豆半島沖地震（マグニチュード6.9）、昭和53（1978）年の伊豆大島近海地震（マグニチュード7.0）などがある。

本市を含めた県全域に被害を及ぼすおそれのある地震の震源地は房総沖、相模湾、神奈川県西部、伊豆半島、駿河湾、遠州灘沖、南海道沖等である。現時点において、本市に著しい被害を及ぼすと想定される地震のうち、その発生の切迫性が指摘されている地震としては、駿河湾を震源域とし県下全域に甚大な被害を及ぼすマグニチュード8クラスの東海地震と、神奈川県西部を震源域とし本県東部地域に甚大な被害を及ぼすマグニチュード7クラスの神奈川県西部の地震などがある。東海地震の震源域では100年から150年間隔で巨大地震が繰り返し発生しているが、嘉永7年・安政元年（1854年）の安政東海地震発生後、160年以上もの間、大地震が発生しておらず、地震活動の空白域となっている。

今世紀前半には前回発生から100年を迎える東南海地震や南海地震について、その発生の可能性の高まりが指摘されており、このまま東海地震が発生することなく推移した場合、東海地震も含め、これらの地震が連動して発生する可能性や、時間差を持って発生する可能性も考えられる。

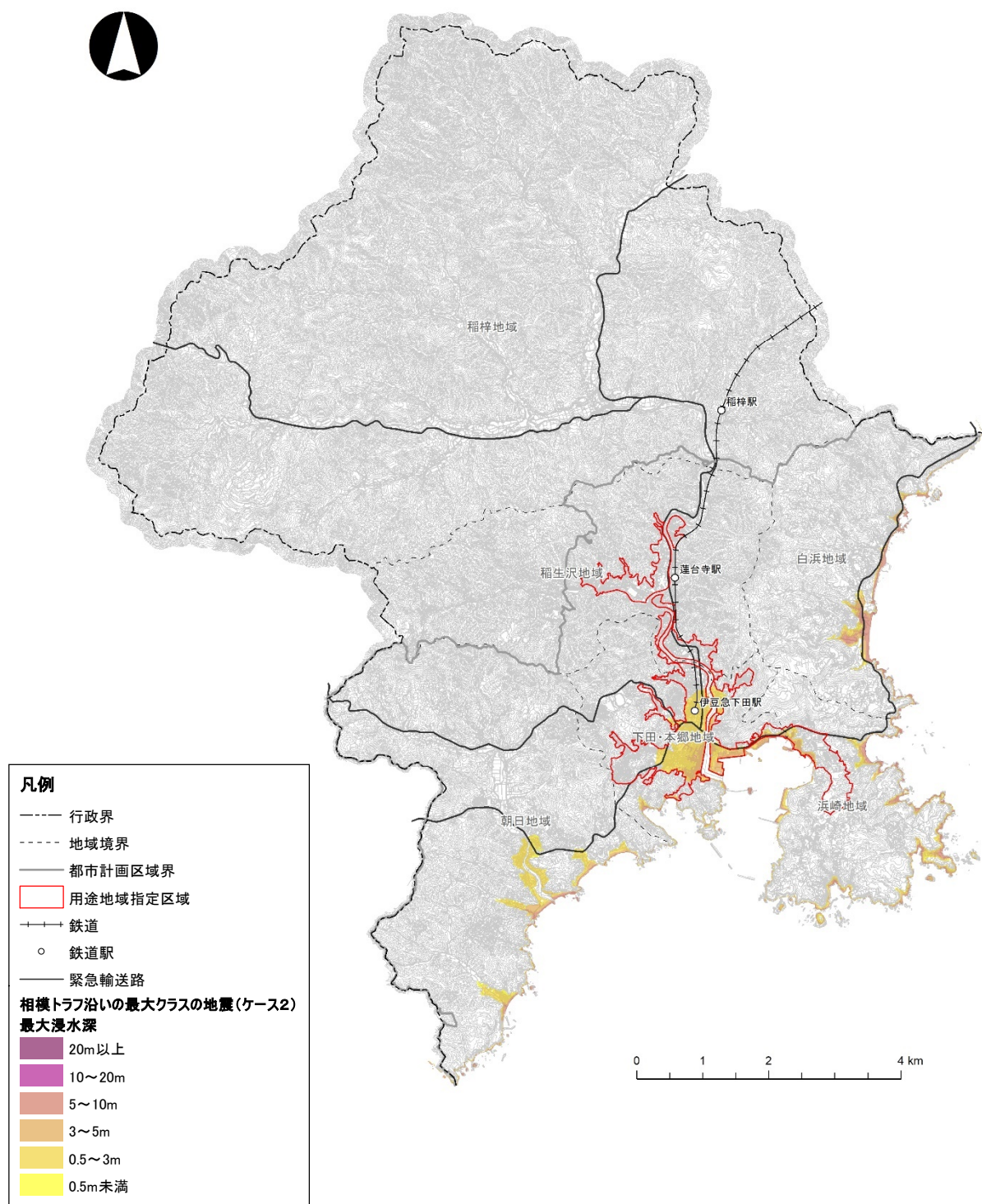
なお、本市では平成23（2011）年3月の東日本大震災の教訓を踏まえ、静岡県第4次地震被害想定の第一次報告（駿河トラフ・南海トラフ沿いと相模トラフ沿いで発生する海溝型の地震について、「発生頻度が比較的高く、発生すれば大きな被害をもたらす地震・津波（レベル1）」と、「頻度は極めて低い、発生すれば甚大な被害をもたらす、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波（レベル2）」に分けて、自然現象の想定、人的・物的被害の想定等を行ったもの）によれば、駿河トラフ・南海トラフ沿いで発生するレベル2の地震・津波では、最悪5千人を超える死傷者の発生が想定されている。

このほかに、山梨県東部、静岡県中部などを震源とする地震においても注意を払っておく必要がある。なお、津波については、これらの沿岸の地震によるものに対する警戒は元より、太平洋の遠方の海域を波源域とする遠地津波についても警戒が必要である。

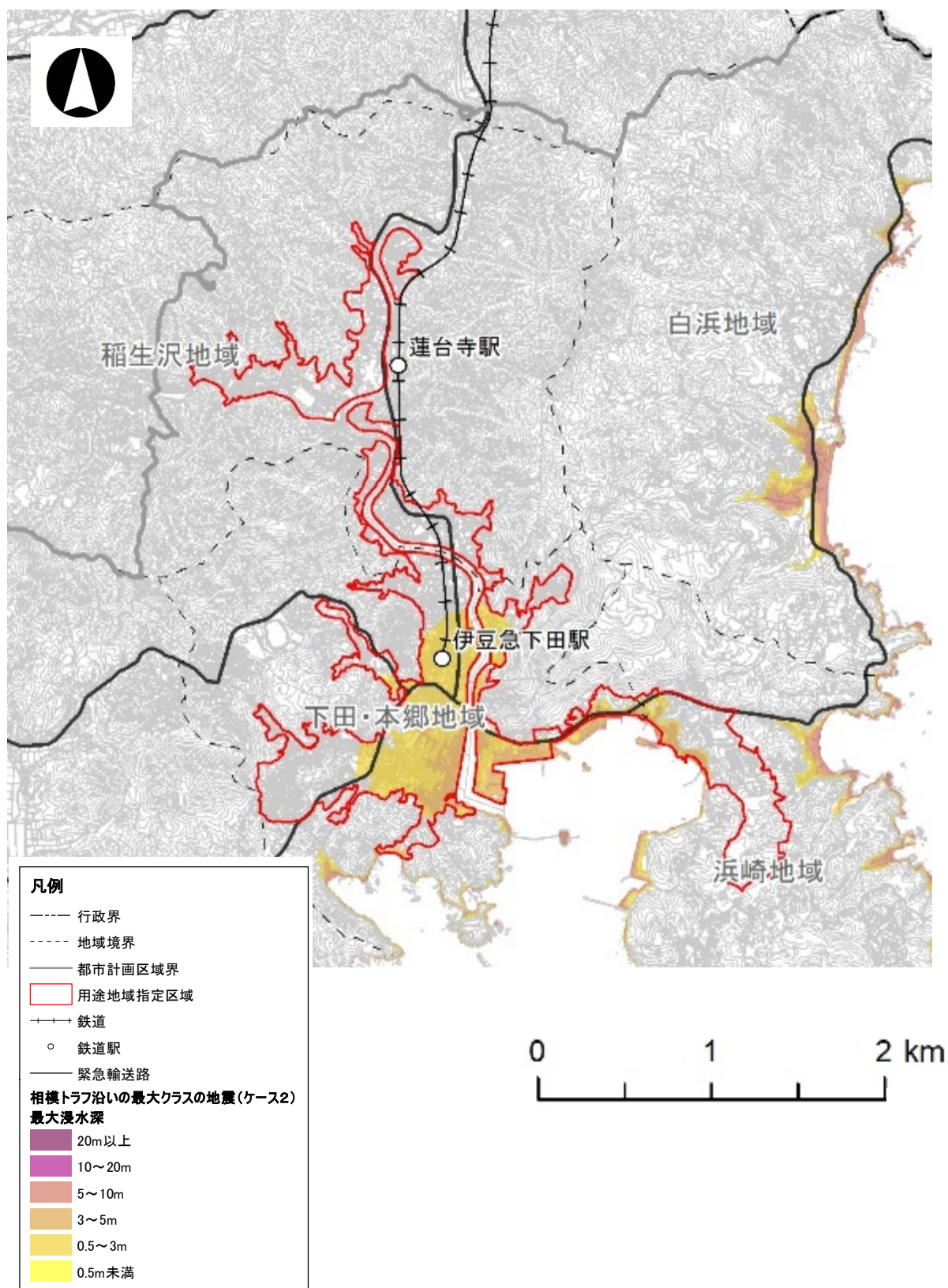
静岡県第4次地震被害想定における津波浸水想定をみると、相模トラフ沿いの最大

クラスの地震では、本市の沿岸部広い範囲が浸水すると想定されている。また、下田・本郷地域や朝日地域では、河川に沿って内陸まで津波が到達すると想定されている。相模トラフ沿いの最大クラスの地震ではケース2（P10・P11参照）、南海トラフ巨大地震ではケース8（P12・P13参照）の浸水面積が最大となる。

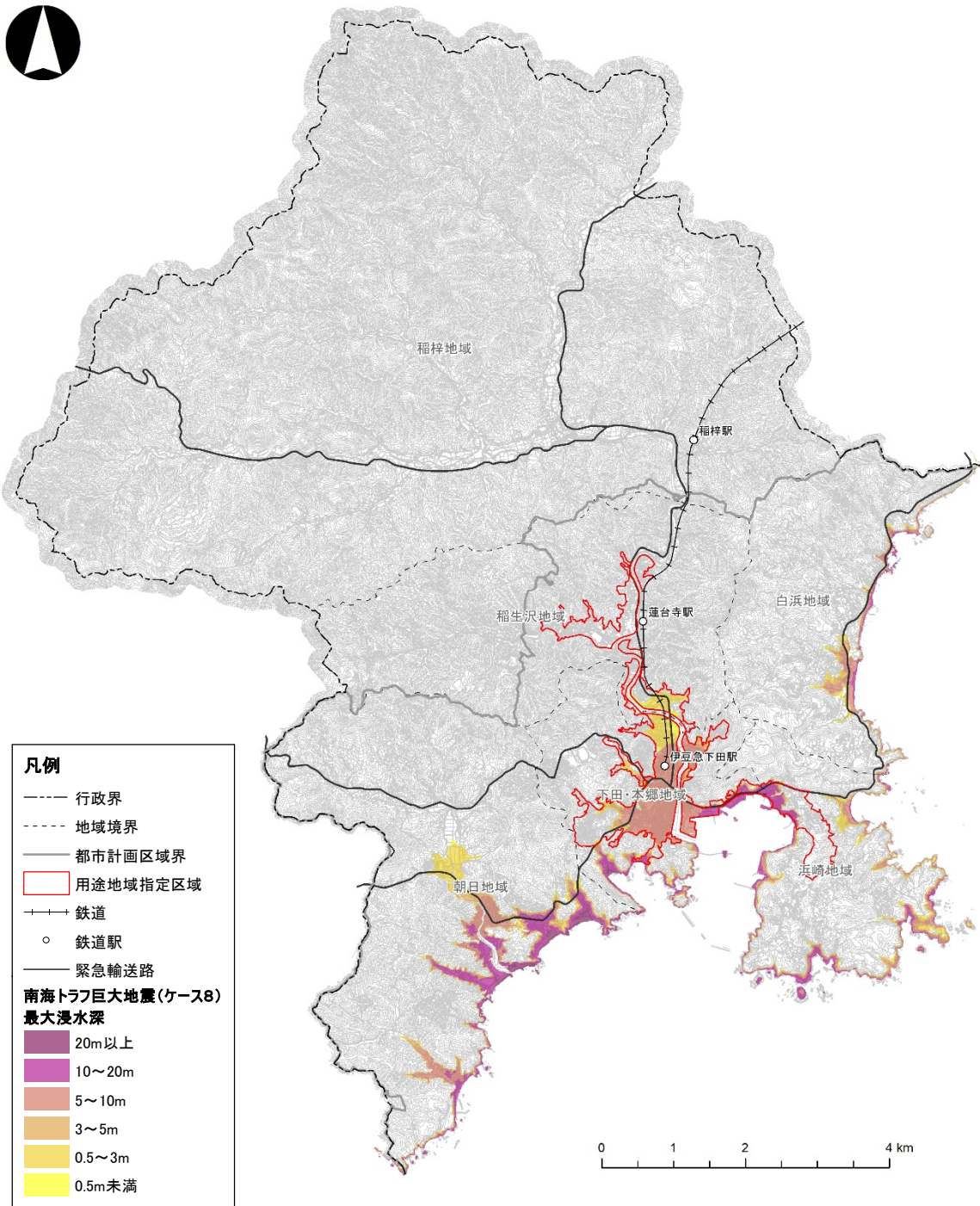
また、液状化可能性の面積が最大となる南海トラフ巨大地震（東側ケース）（P14・P15参照）による液状化危険度についてみると、下田・本郷地域、沿岸部の海岸線沿い、稲生沢川沿いにおける液状化が顕著である。特に、下田・本郷地域の中でも、「旧町内」と呼ばれる中心市街地沿岸部は、かつては、「波が打ち寄せ、葦が生い茂るような場所」であったとされ（資料：図説下田市史増補版）、地盤が脆弱な地域であり、現状の建物が密集する状況への対応が求められる。



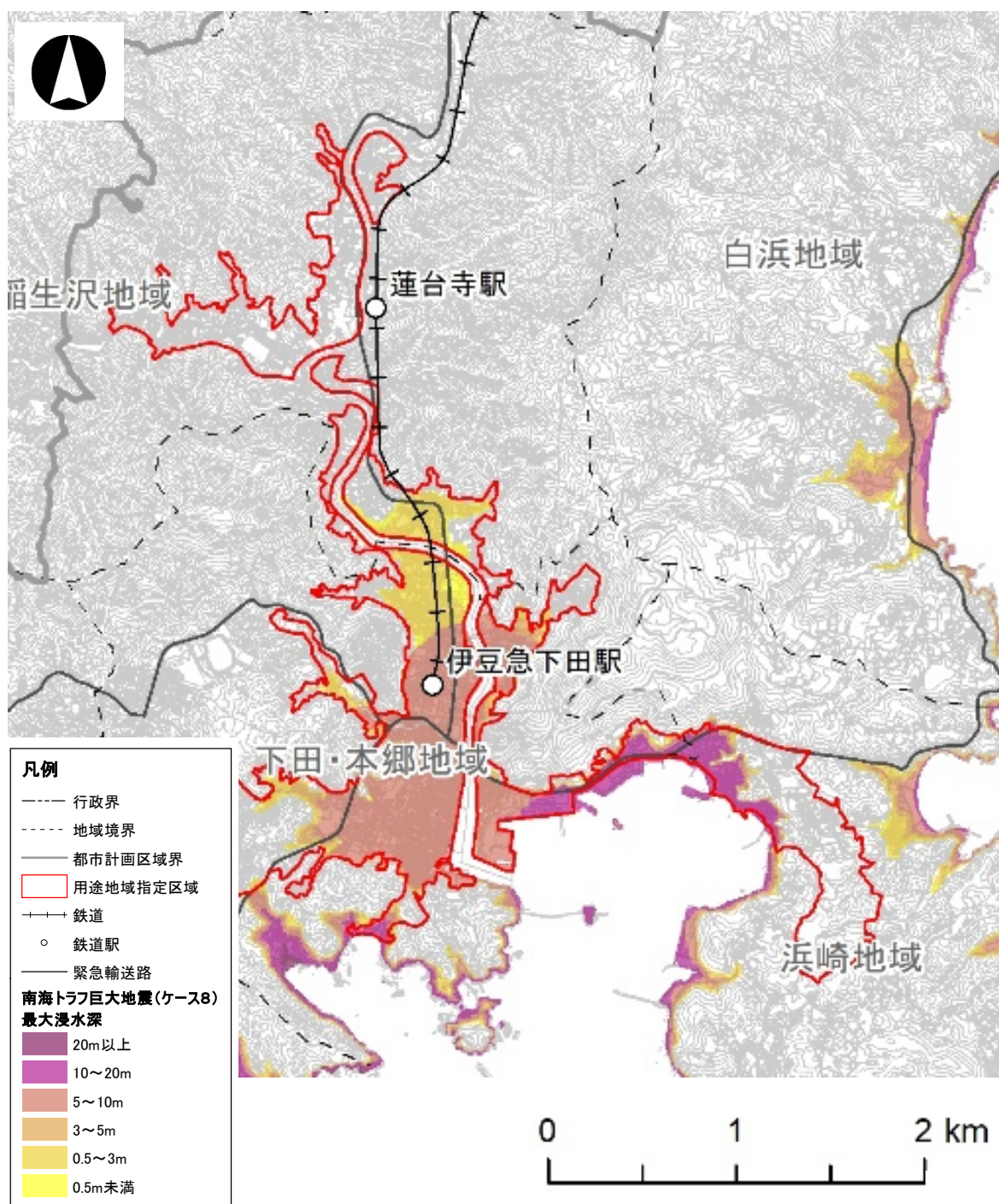
図－相模トラフ沿いの最大クラスの地震（ケース2）による津波浸水想定区域（全市）
（資料：相模トラフ沿いで発生する地震の地震動・津波浸水想定）



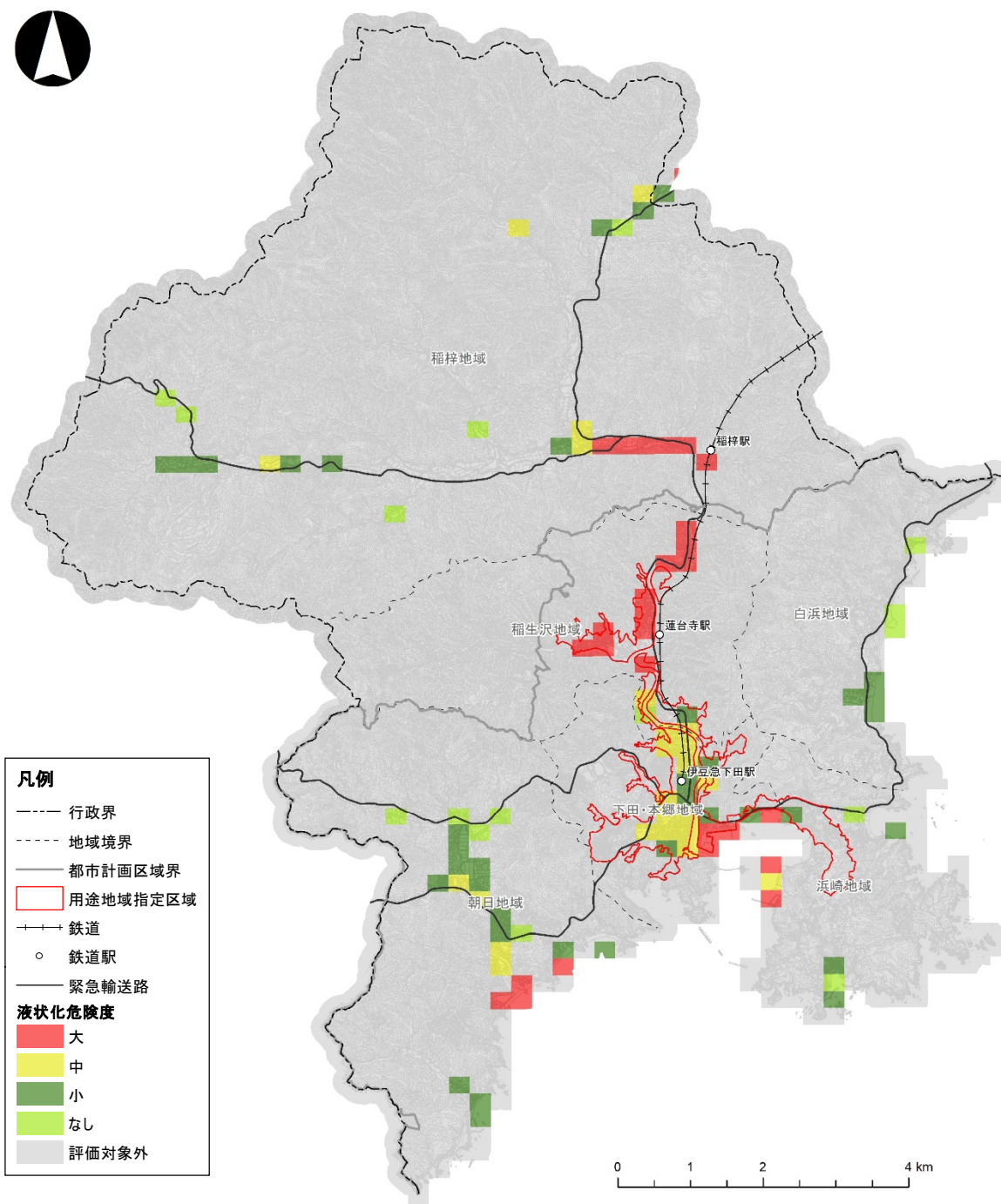
図－相模トラフ沿いの最大クラスの地震（ケース2）による津波浸水想定区域（用途地域）
（資料：相模トラフ沿いで発生する地震の地震動・津波浸水想定）



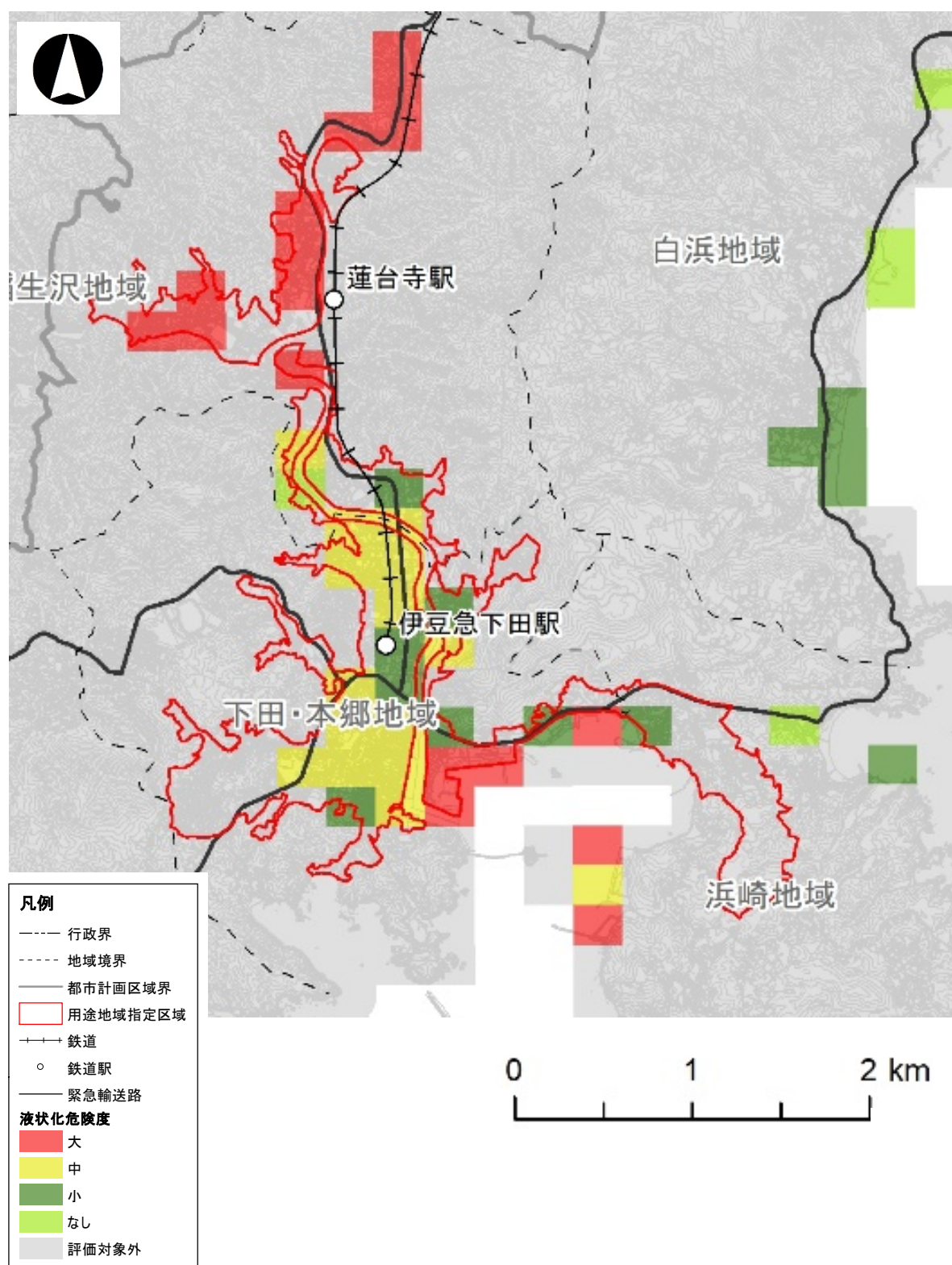
図ー南海トラフ巨大地震（ケース8）による津波浸水想定区域（全市）
（資料：静岡県第4次地震被害想定）



図ー南海トラフ巨大地震（ケース8）による津波浸水想定区域（用途地域）
 （資料：静岡県第4次地震被害想定）



図－南海トラフ巨大地震（東側ケース）による液状化危険度（全市）
（資料：静岡県第4次地震被害想定）



図－南海トラフ巨大地震（東側ケース）による液状化危険度（用途地域）
（資料：静岡県第4次地震被害想定）

(2) 風水害

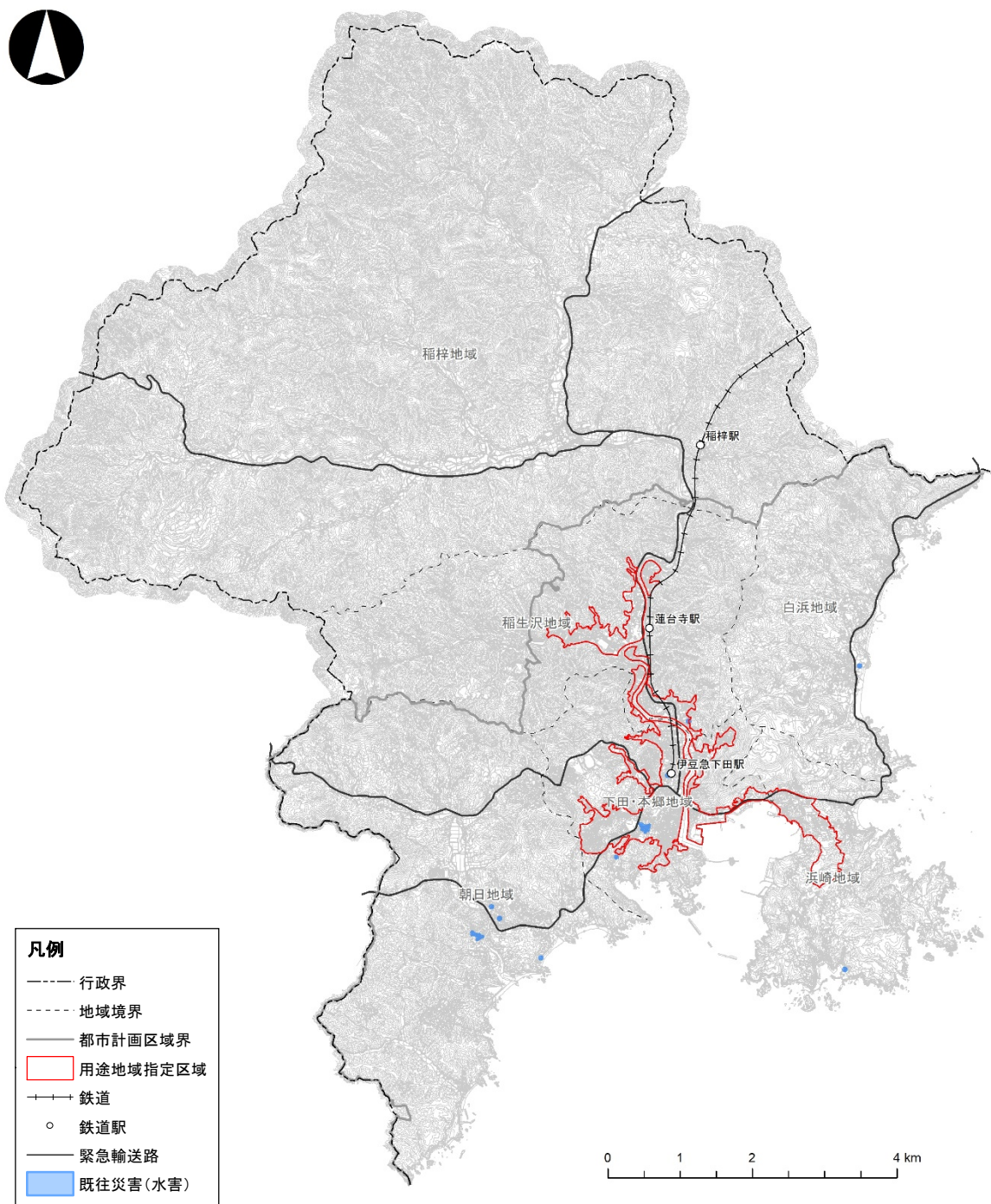
過去において、水害は稲生沢川などの主要河川が直接原因となって起こる場合が多かったが、最近では、主要河川の治水対策の進みに比べ、比較的対策が遅れている中小河川に水害が発生する事例が多くなってきている。平成3（1991）年9月には、局地的豪雨により落合地区で死者4名を出す災害が発生した。このときの降雨量は、総雨量392mmで時間最大雨量90mmを記録した。

災害は予期されない事態によって起こるものであって、主要河川にあってもなお災害発生 of 要素を持っており、社会開発の進展につれ新しい災害も予想される。

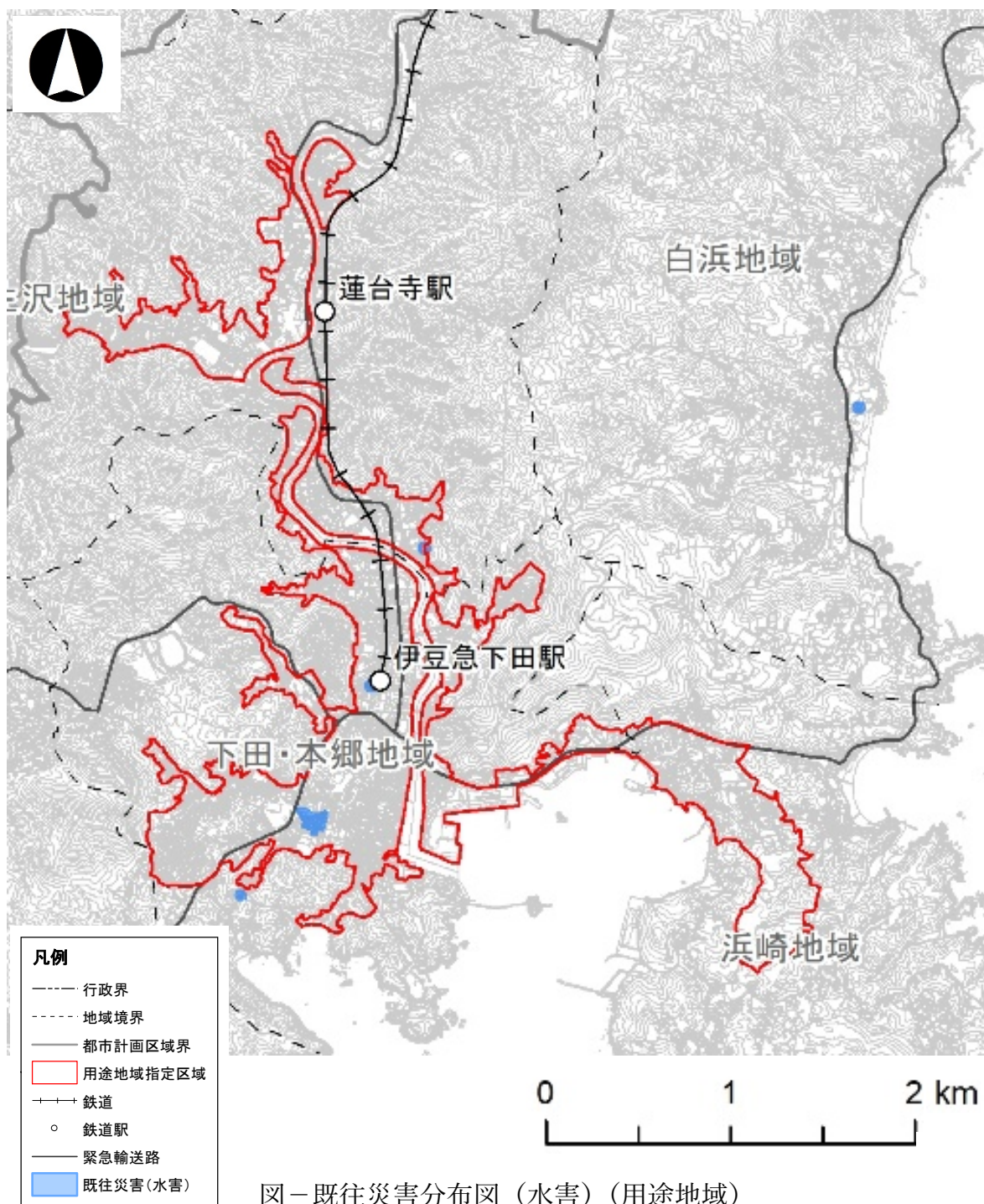
季節的には、6～7月の梅雨前線活動の活発化により、大雨や局地的豪雨に見舞われることがある。また、8～10月にかけては台風の接近又は上陸により、暴風雨による災害が発生することがある。さらに、線状降水帯等による集中豪雨が発生することがある。

既往の水害の発生位置をみると、下田・本郷地域、朝日地域、浜崎地域、白浜地域に点在しているが、広範囲に及ぶ被害はみられない。

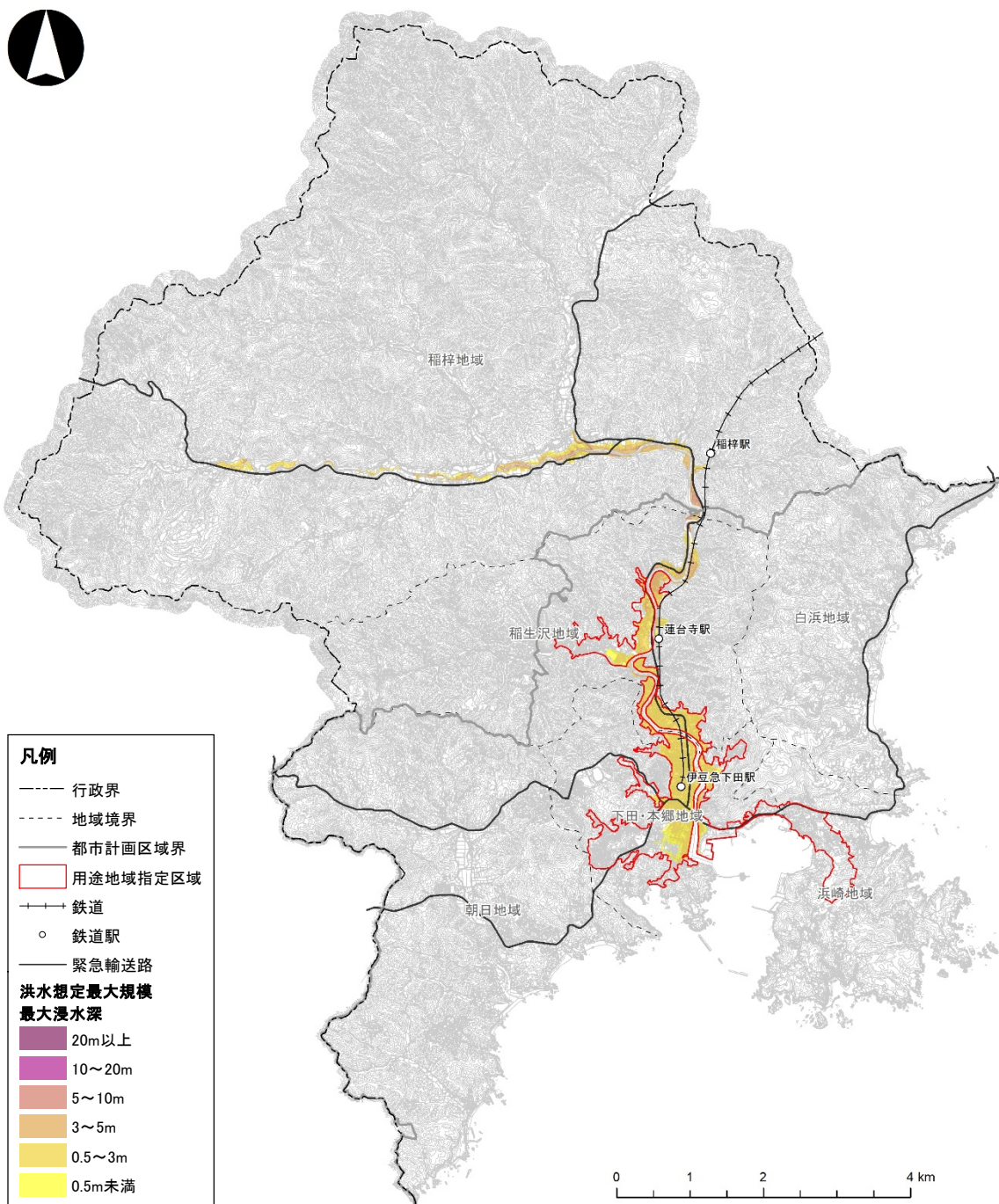
洪水浸水想定区域についてみると、下田・本郷地域、稲生沢地域、稲梓地域における稲生沢川沿いの市街地・集落地での浸水の危険性が高く、対応が求められる。



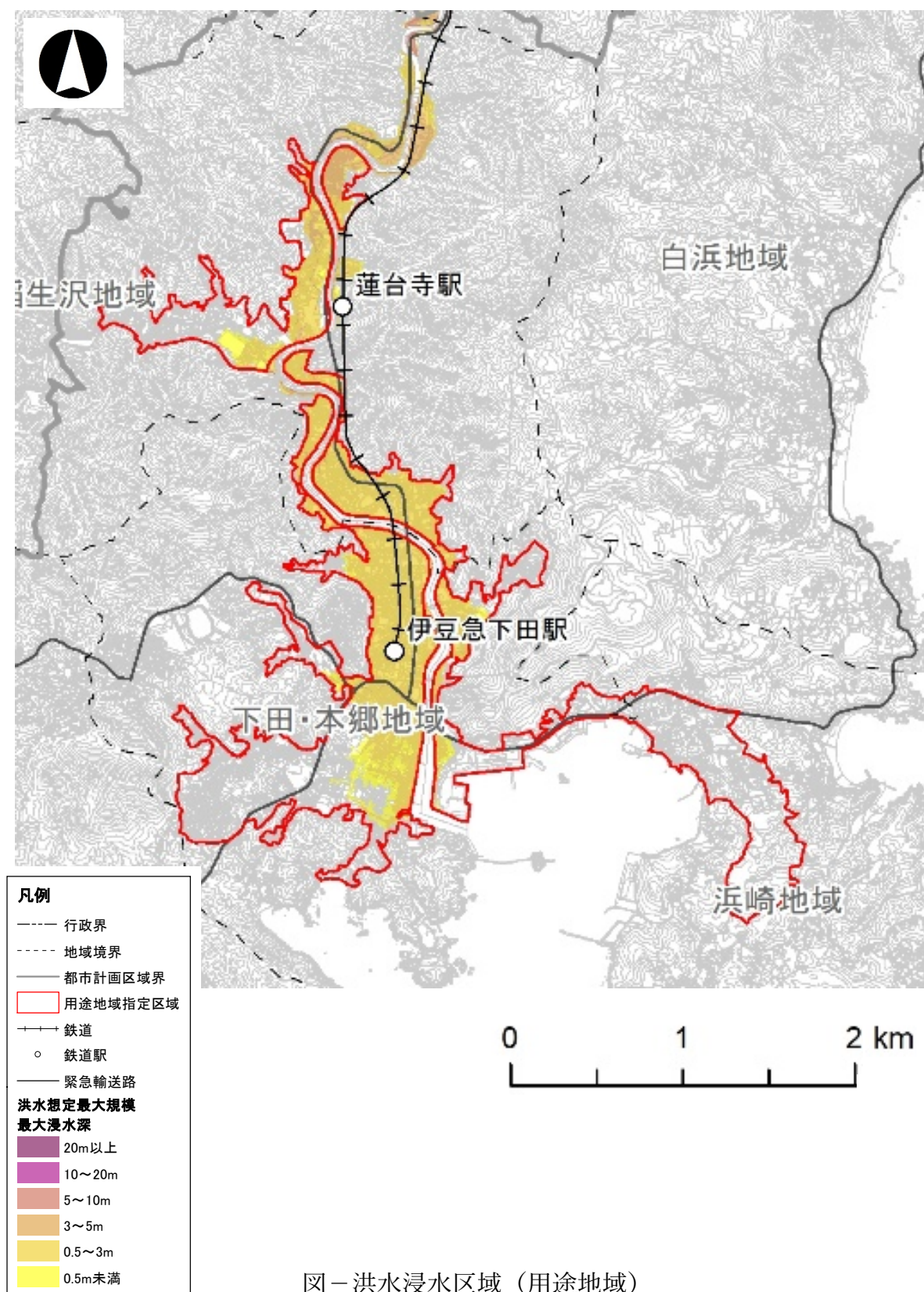
図一 既往災害分布図（水害）（全市）
 （資料：平成28年都市計画基礎調査）



図一 既往災害分布図（水害）（用途地域）
（資料：平成28年都市計画基礎調査）



図－洪水浸水区域（全市）
（資料：下田市土砂災害・洪水ハザードマップ）



図－洪水浸水区域（用途地域）
 （資料：下田市土砂災害・洪水ハザードマップ）

(3) 土石流・地すべり・がけくずれ

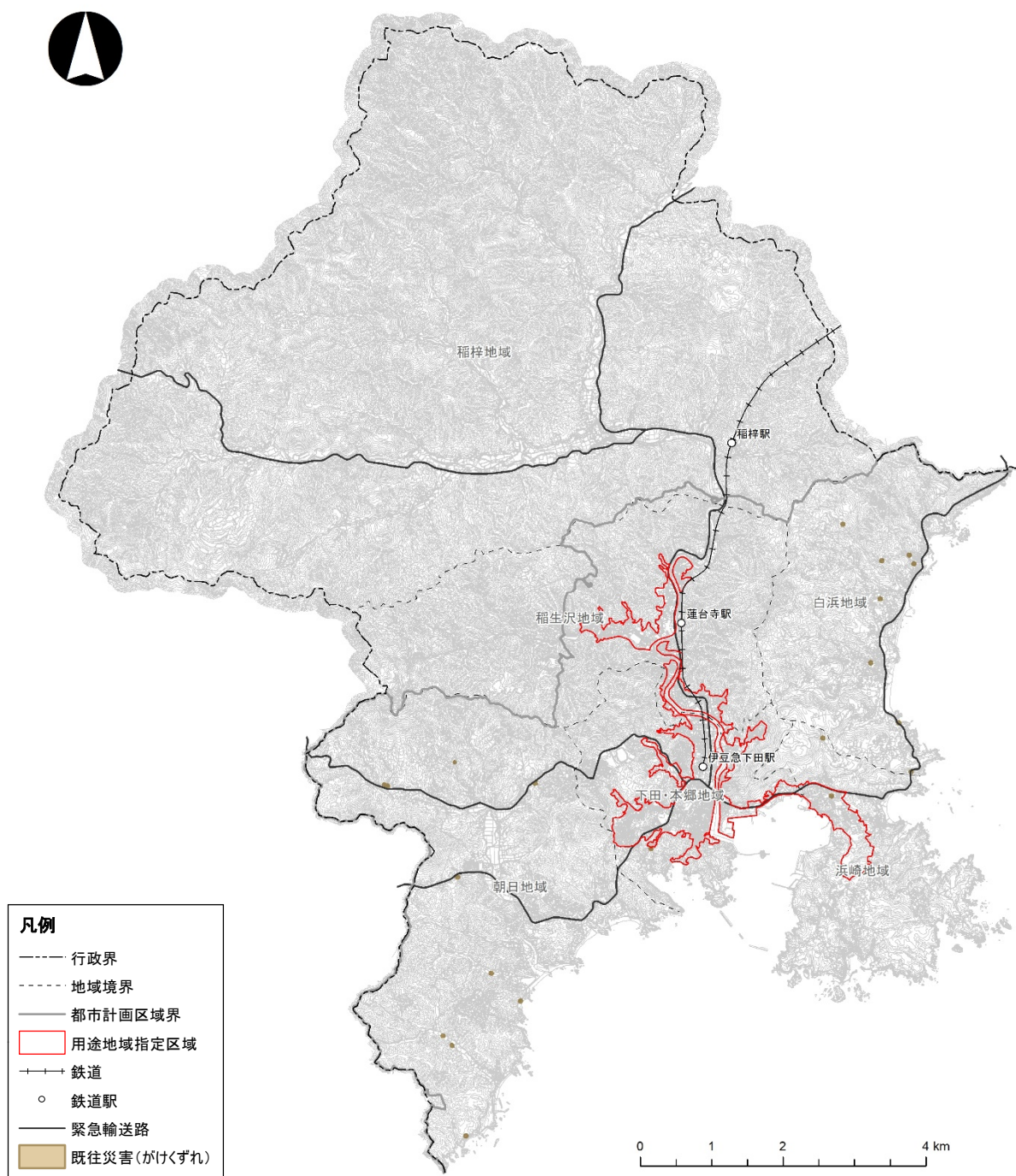
急傾斜地崩壊危険区域が47か所、また、土砂災害特別警戒区域が土石流では183か所、急傾斜地の崩壊では328か所指定されており、豪雨時、地震時には相当の被害が予想される。

既往の土砂災害の発生位置をみると、朝日地域、浜崎地域、白浜地域に点在している。

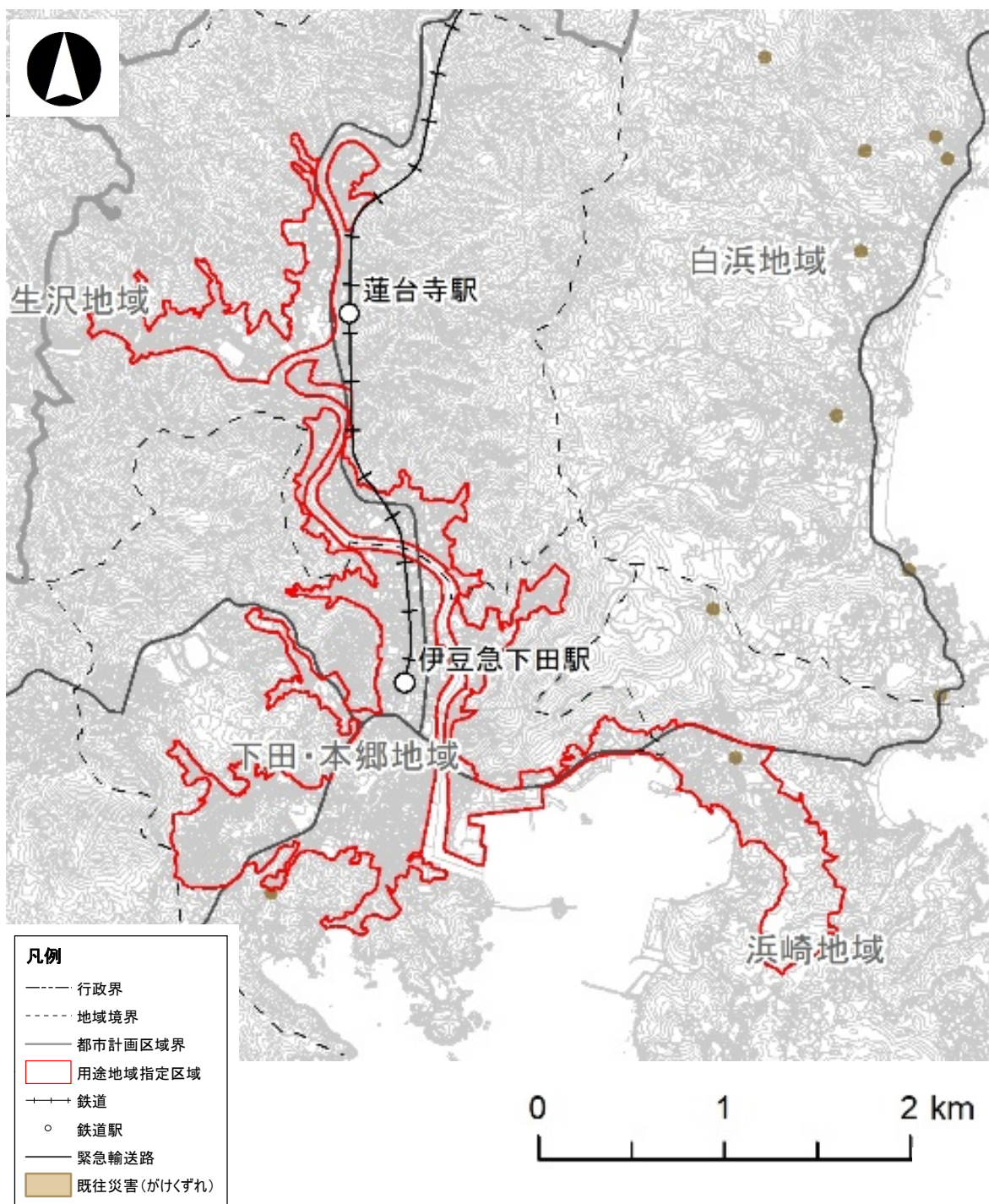
土砂災害特別警戒区域・土砂災害警戒区域の指定についてみると、市内全域における指定がみられる。

本市の地勢は、三方を山に囲まれており、このため急傾斜地下に市街地・集落が形成している地形的な特徴より、市民が居住するエリアと土砂災害特別警戒区域・土砂災害警戒区域が接している箇所が多く、対応が求められる。

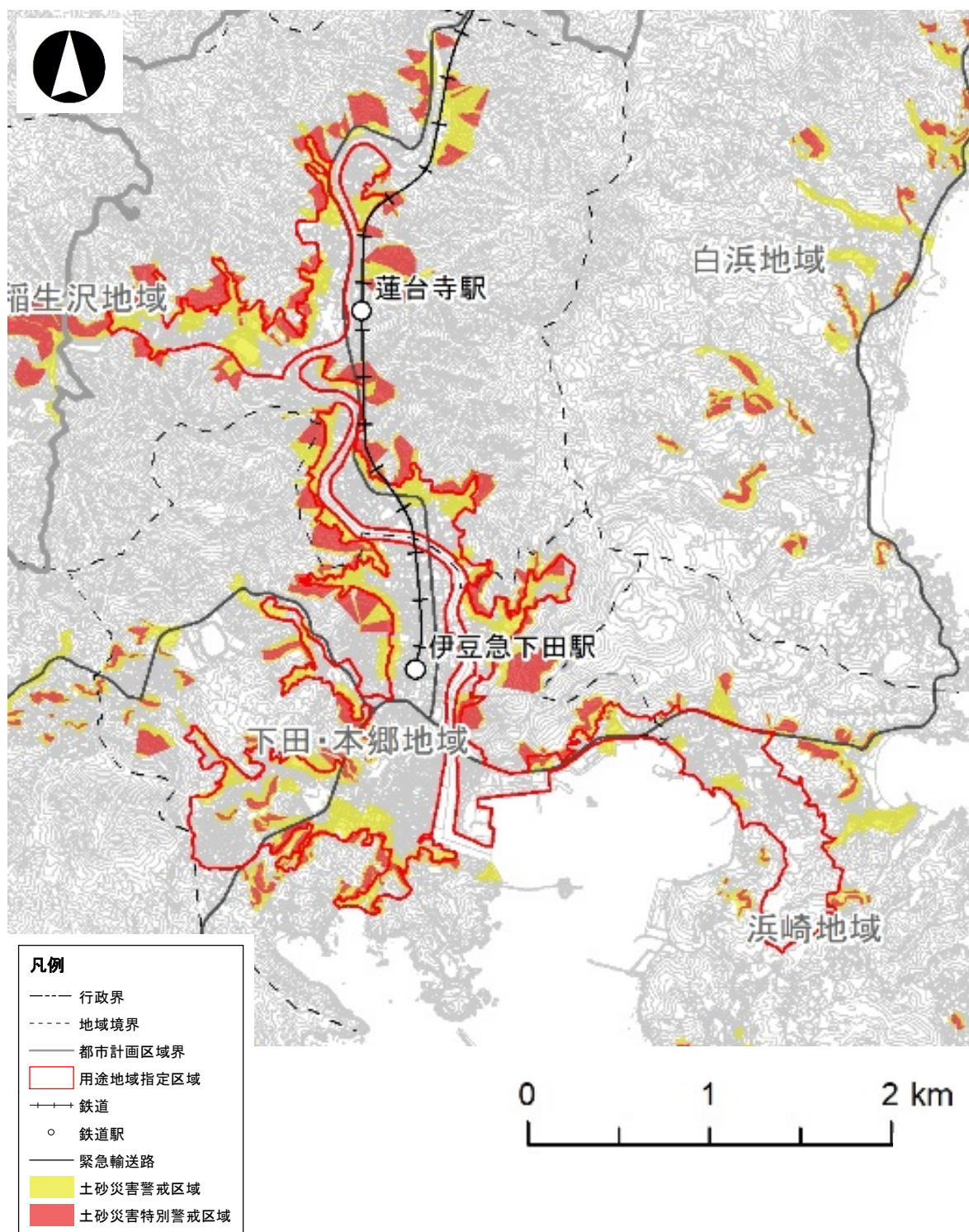
砂防指定地、急傾斜地崩壊危険区域、地すべり防止区域についてみると、緊急輸送路沿道や伊豆急行線沿線において、急傾斜地崩壊危険区域や砂防指定地の指定が多くみられ、災害時の交通網確保の観点からも対応が求められる。



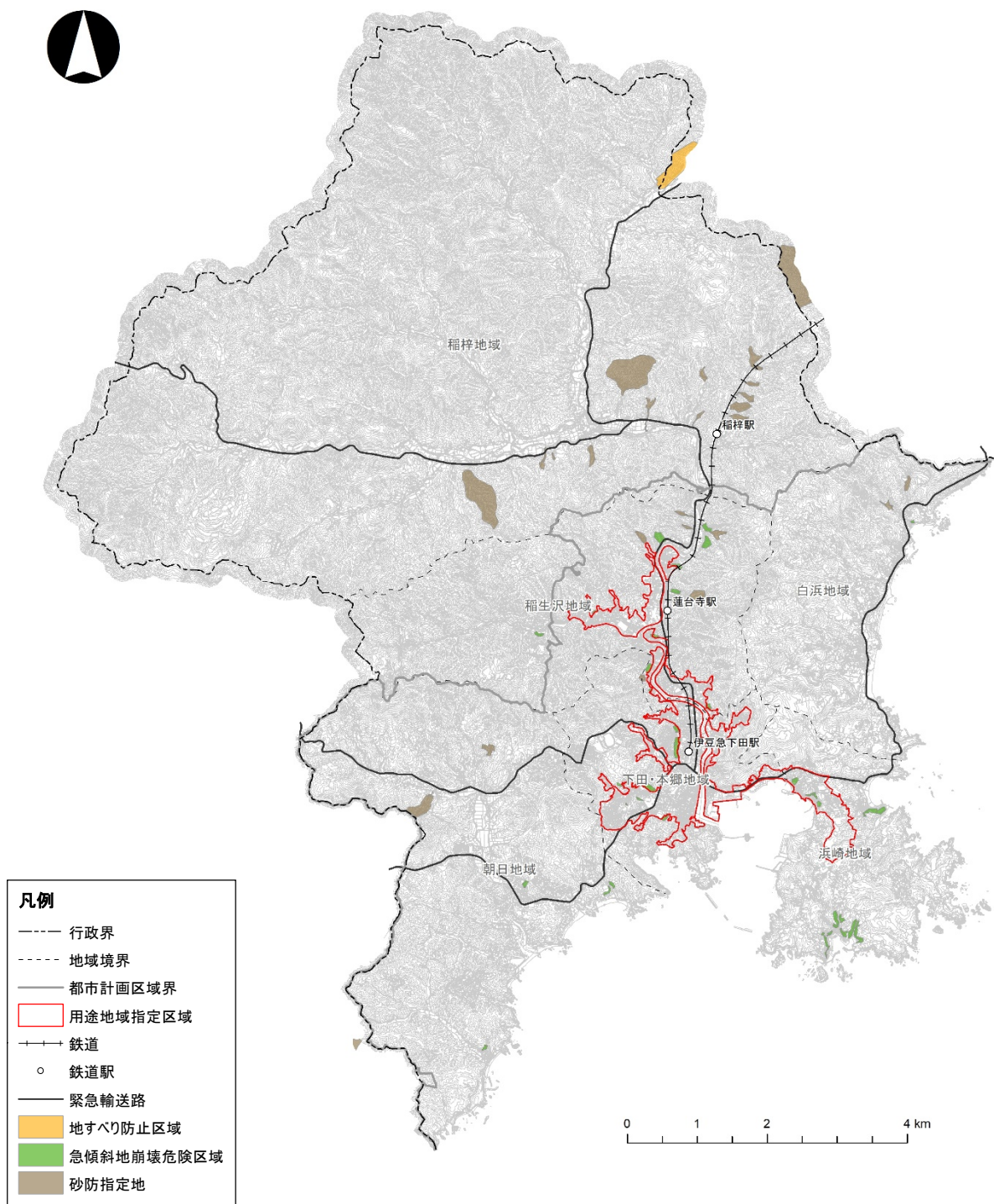
図一 既往災害分布図（がけくずれ）（全市）
（資料：平成28年都市計画基礎調査）



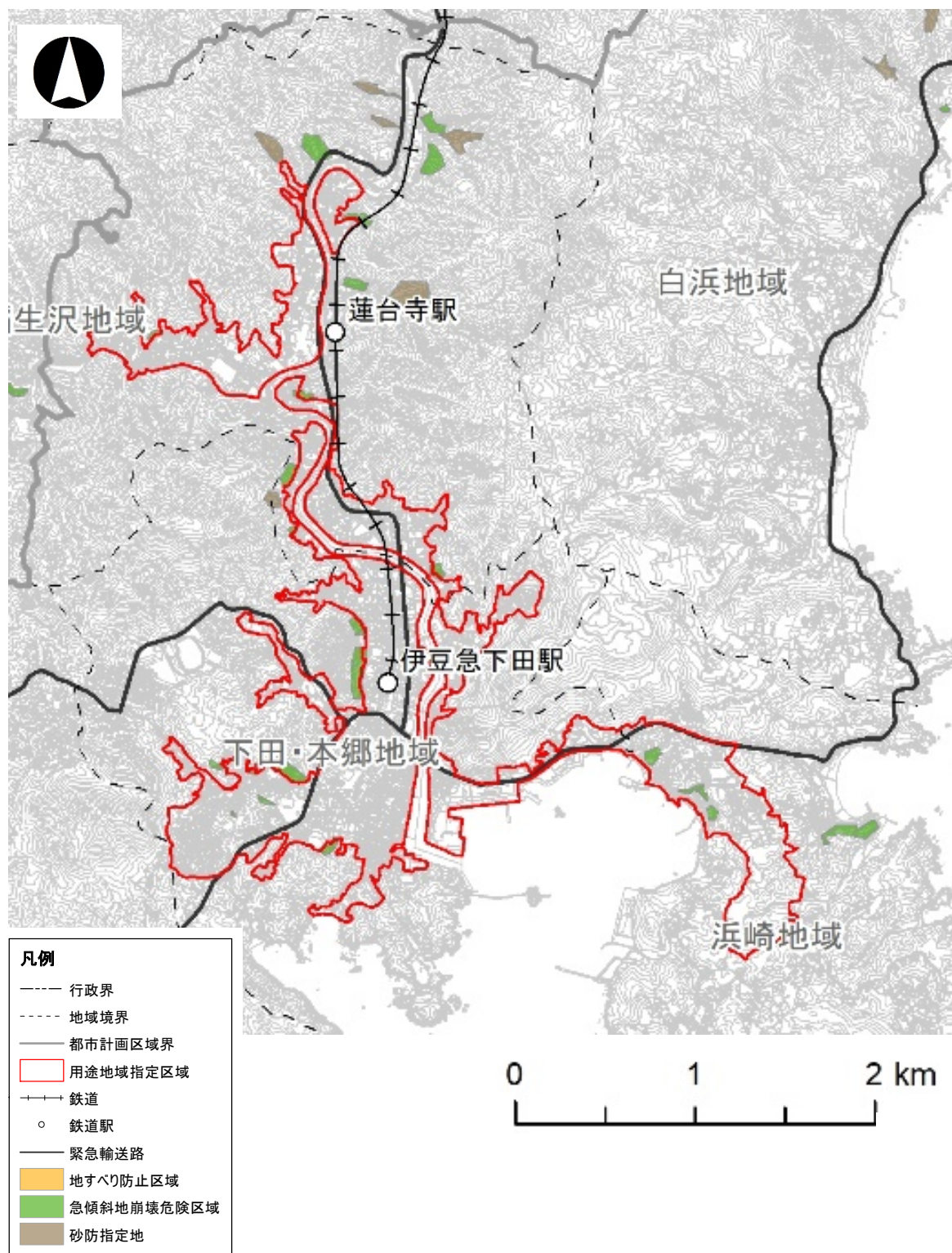
図一既往災害分布図（がけくずれ）（用途地域）
（資料：平成28年都市計画基礎調査）



図一 土砂災害特別警戒区域・土砂災害警戒区域（用途地域）
（資料：国土数値情報）



図－砂防指定地、急傾斜地崩壊危険区域、地すべり防止区域（全市）
（資料：静岡県）



図－砂防指定地、急傾斜地崩壊危険区域、地すべり防止区域（用途地域）
（資料：静岡県）

(4) 火災

ホテル、旅館の大型化が進み、さらに生活様式の多様化、石油ガス類等危険物の普及により火災の様相も複雑化しているほか、冬期には強風が吹く日も多く、特に住宅密集地では延焼拡大も懸念されるなど多数の人命が失われる危険があり、十分な注意が必要である。

(5) 高潮、高波

太平洋に面し長い海岸線を有しているので、台風や低気圧等による高潮、高波の影響を受け易いので警戒が必要である。

(6) 水難

市内の海岸では、特に夏、海水浴客の増加や、ボート、ヨット等のマリレジャーの多様化により、水難事故の発生が予想される。

(7) 原子力災害

原子力災害については、県内に浜岡原子力発電所があり、本市は静岡県が定めた原子力災害対策を重点的に実施すべき区域には指定されていないが、万一の事故による放射性物質の大量放出に伴う災害対策が必要である。

(8) 複合災害・連続災害

一つの災害が他の災害を誘発し、それが原因となって、又は結果となって全体としての被害が大きくなることを意識し、より厳しい事態を想定した対策を講じることが必要である。本市の場合、南海トラフ巨大地震などの大規模地震の発生に伴い、大規模事故や浜岡原子力発電所の事故が複合的に起こるなど最悪の事態を想定する必要がある。また、過去には、宝永4（1707）年10月28日に宝永地震（マグニチュード8.6）が発生し、49日後に富士山の宝永噴火が始まった例もあり、海溝型巨大地震の前後に連続して富士山が噴火する場合も想定しておく必要がある。

(9) その他

不慮の災害として、航空機の墜落、火山の噴火、有毒ガスの発生、排出油の漂着などの大規模な災害が発生しており、本市でも発生の可能性がある。

【予想される災害リスク一覧】

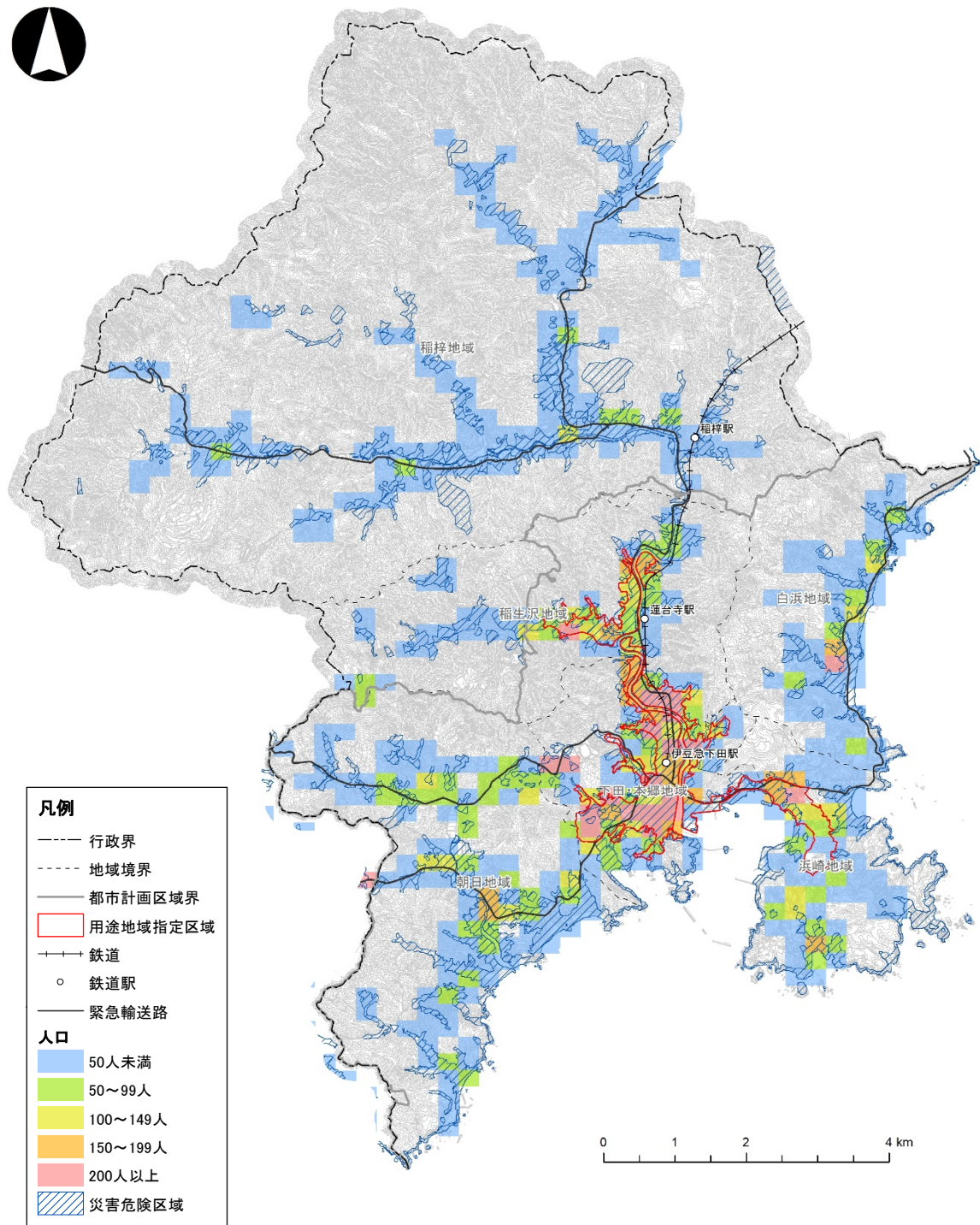
	予想される 災害リスク	概要
1	地震、津波	・ 静岡県第4次地震被害想定の第一次報告より、駿河トラフ・南海トラフ沿いで発生するレベル2の地震・津波では、最悪5千人を超える死傷者の発生が想定されている。
2	風水害	・ 洪水浸水想定区域についてみると、下田・本郷地域、稲生沢地域、稲梓地域における稲生沢川沿いの市街地・集落地での浸水の危険性が高くなっている。
3	土石流・ 地すべり・ がけくずれ	・ 市の地勢は、三方を山に囲まれており、このため急傾斜地下に集落が点在している。急傾斜地崩壊危険区域が47か所、また、土砂災害特別警戒区域が土石流では183か所、急傾斜地の崩壊では328か所指定されており、豪雨時、地震時には相当の被害が予想される。
4	火災	・ ホテル、旅館の大型化が進み、さらに生活様式の多様化、石油ガス類等危険物の普及により火災の様相も複雑化しているほか、冬期には強風が吹く日も多く、特に住宅密集地では延焼拡大も懸念されるなど多数の人命が失われる危険があり、十分な注意が必要である。
5	高潮、高波	・ 太平洋に面し長い海岸線を有しているので、台風や低気圧等による高潮、高波の影響を受け易いので警戒が必要である。
6	水難	・ 市内の海岸では、特に夏、海水浴客の増加や、ボート、ヨット等のマリレジャーの多様化により、水難事故の発生が予想される。
7	原子力災害	・ 原子力災害については、県内に浜岡原子力発電所があり、本市は静岡県が定めた原子力災害対策を重点的に実施すべき区域には指定されていないが、万一の事故による放射性物質の大量放出に伴う災害対策が必要である。
8	複合災害・ 連続災害	・ 一つの災害が他の災害を誘発し、それが原因となって、又は結果となって全体としての被害が大きくなることを意識し、より厳しい事態を想定した対策を講じることが必要である。過去には、宝永4(1707)年10月28日に宝永地震(マグニチュード8.6)が発生し、49日後に富士山の宝永噴火が始まった例もあり、海溝型巨大地震の前後に連続して富士山が噴火する場合も想定しておく必要がある。
9	その他	・ 不慮の災害として、航空機の墜落、火山の噴火、有毒ガスの発生、排出油の漂着などの大規模な災害が発生しており、本市でも発生の可能性がある。

2-3 災害危険区域

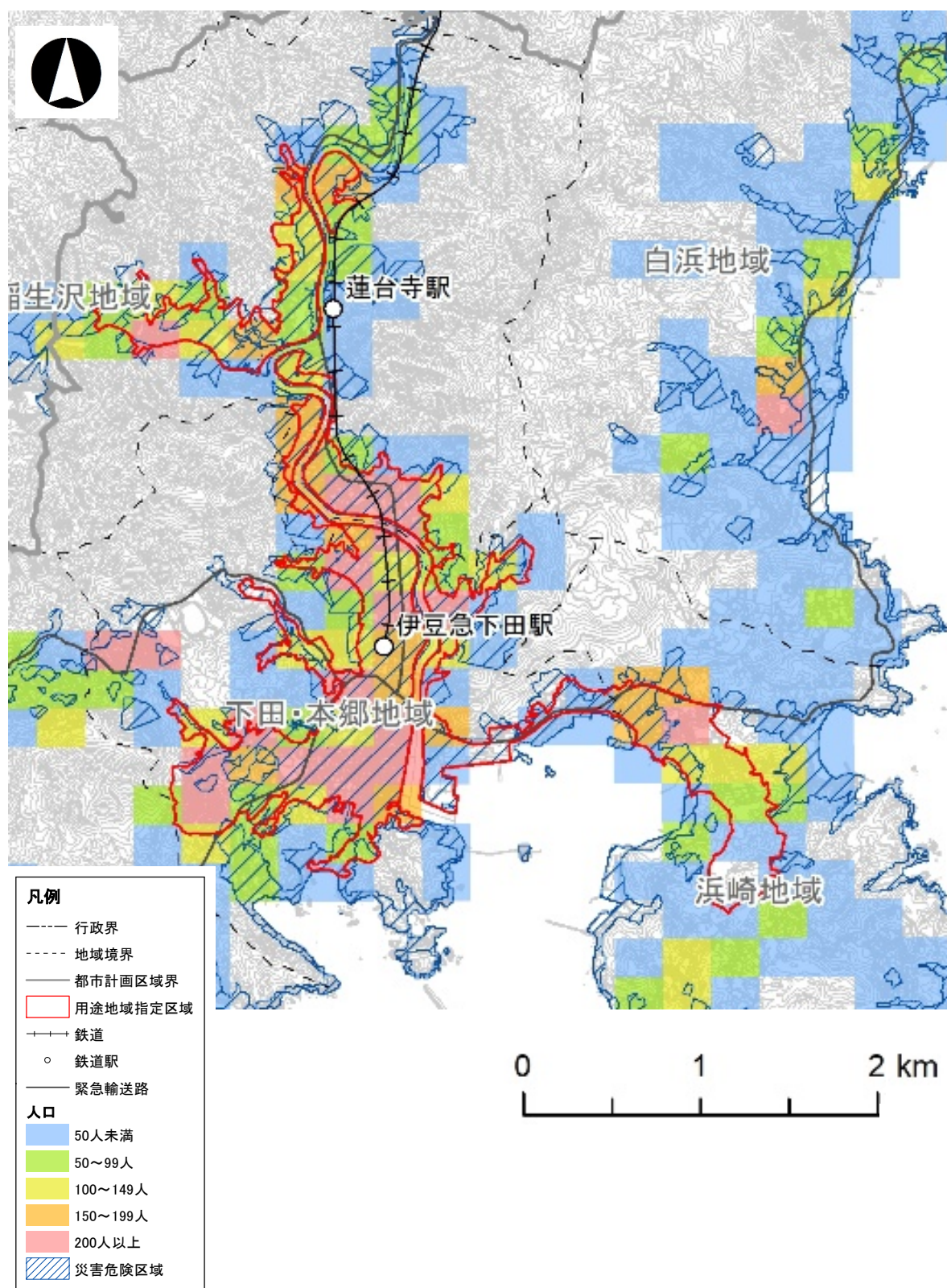
災害危険区域及び人口250mメッシュの重ね合わせより、災害危険区域に居住する人口を算出すると、21,963人となり、本市の総人口23,204人（平成27年国勢調査）のうち94.7%がいずれかの災害危険性のある場所に居住しており、国土強靱化による取組強化が求められる。

※災害危険区域：

津波浸水想定区域、洪水浸水想定区域、土砂災害特別警戒区域・土砂災害警戒区域、砂防指定地、急傾斜地崩壊危険区域のエリアを合わせた区域とする。



図－災害危険区域内の人口（全市）



図－災害危険区域内の人口（用途地域）

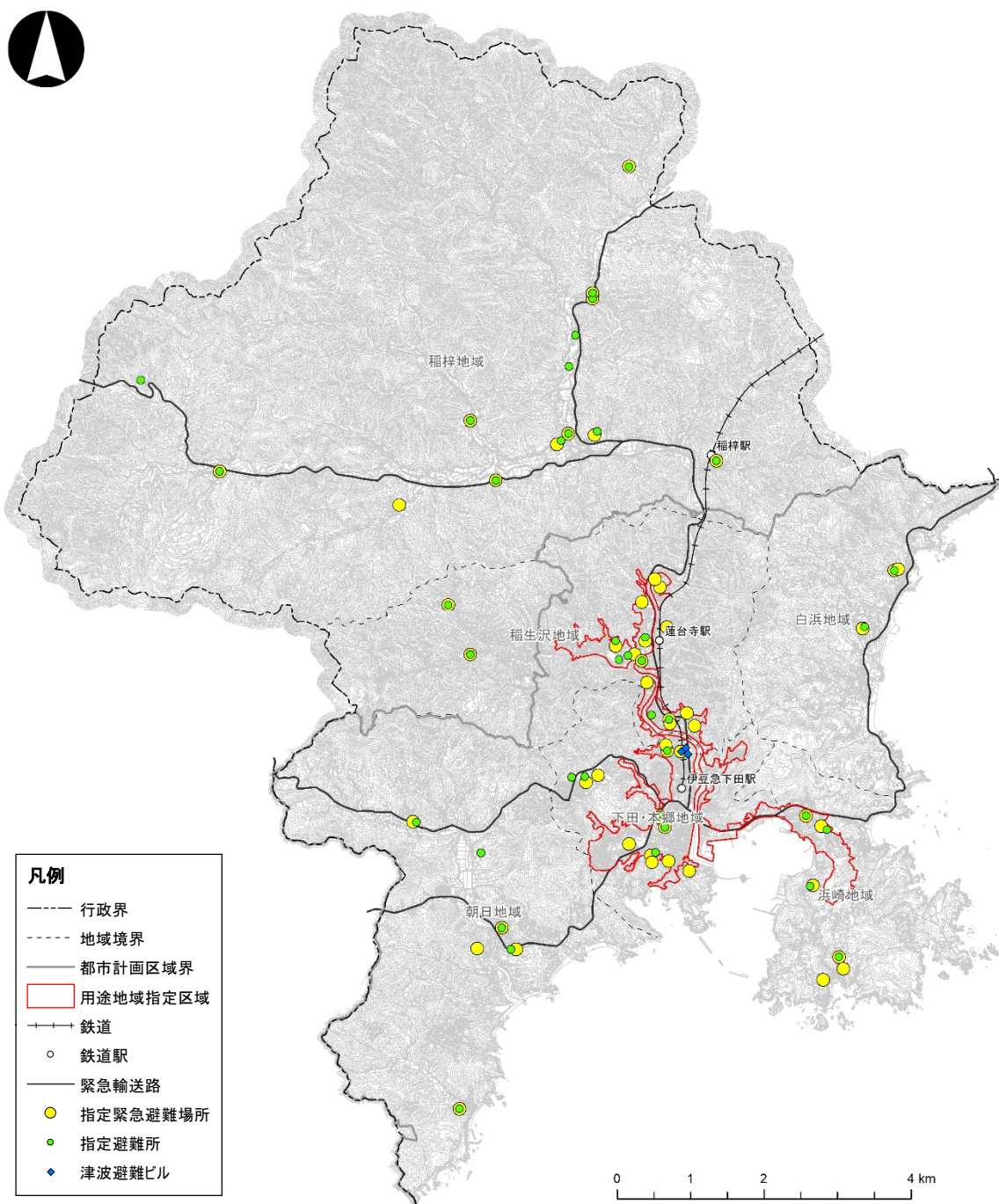
2-4 避難施設

避難施設の分布をみると、指定避難所や指定緊急避難場所が市内各地に設置されている。また、伊豆急下田駅の北側には、津波避難ビルが3か所確保されている。

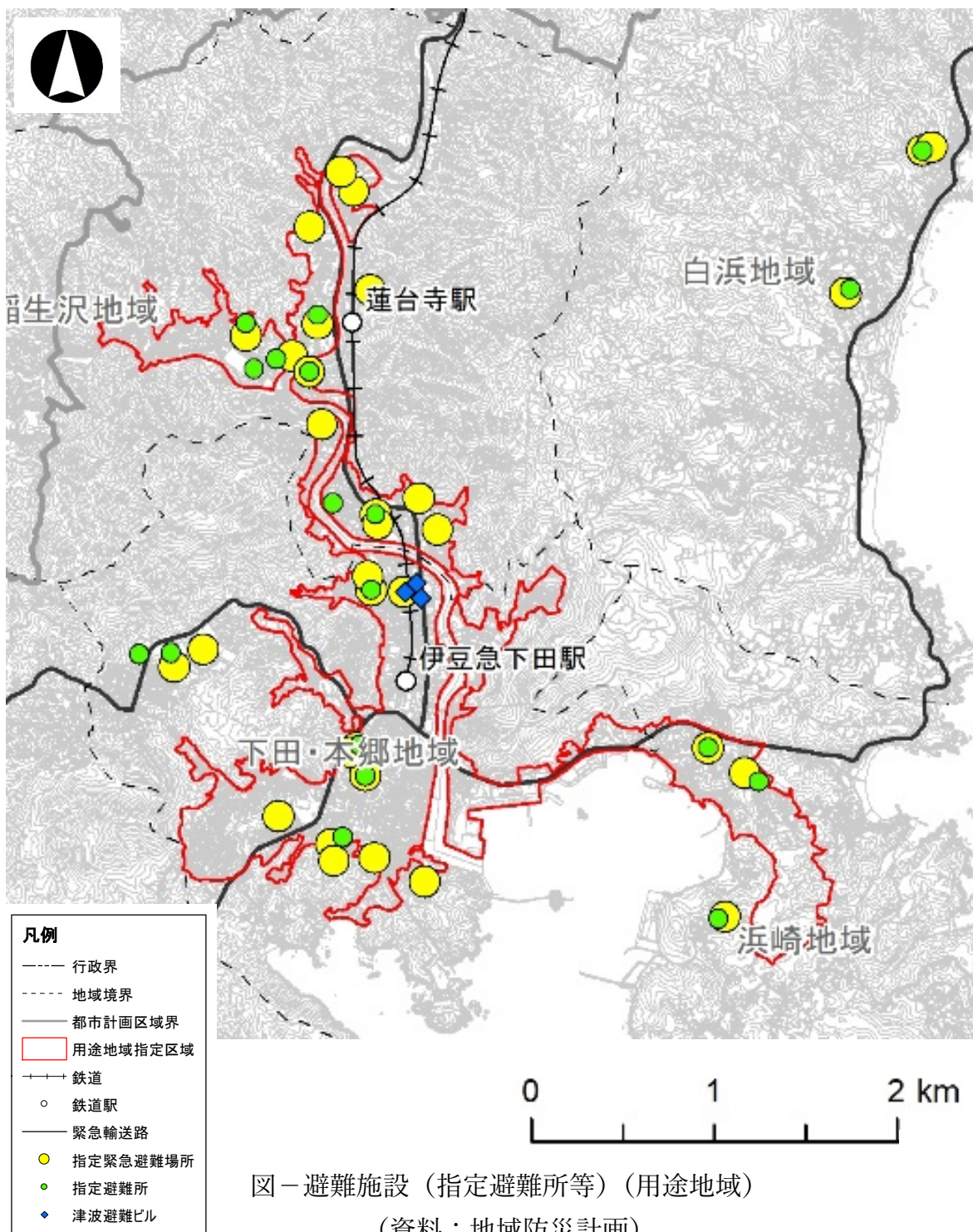
避難所圏域人口及び人口250mメッシュの重ね合わせより、避難所圏域に居住する人口を算出すると、17,185人となり、本市の総人口23,204人（平成27年国勢調査）のうち74.1%が避難所圏域内に居住している一方で、残りの25.9%は避難所圏域外に居住しており、円滑な避難に向けた取組強化が求められる。

※避難所圏域：

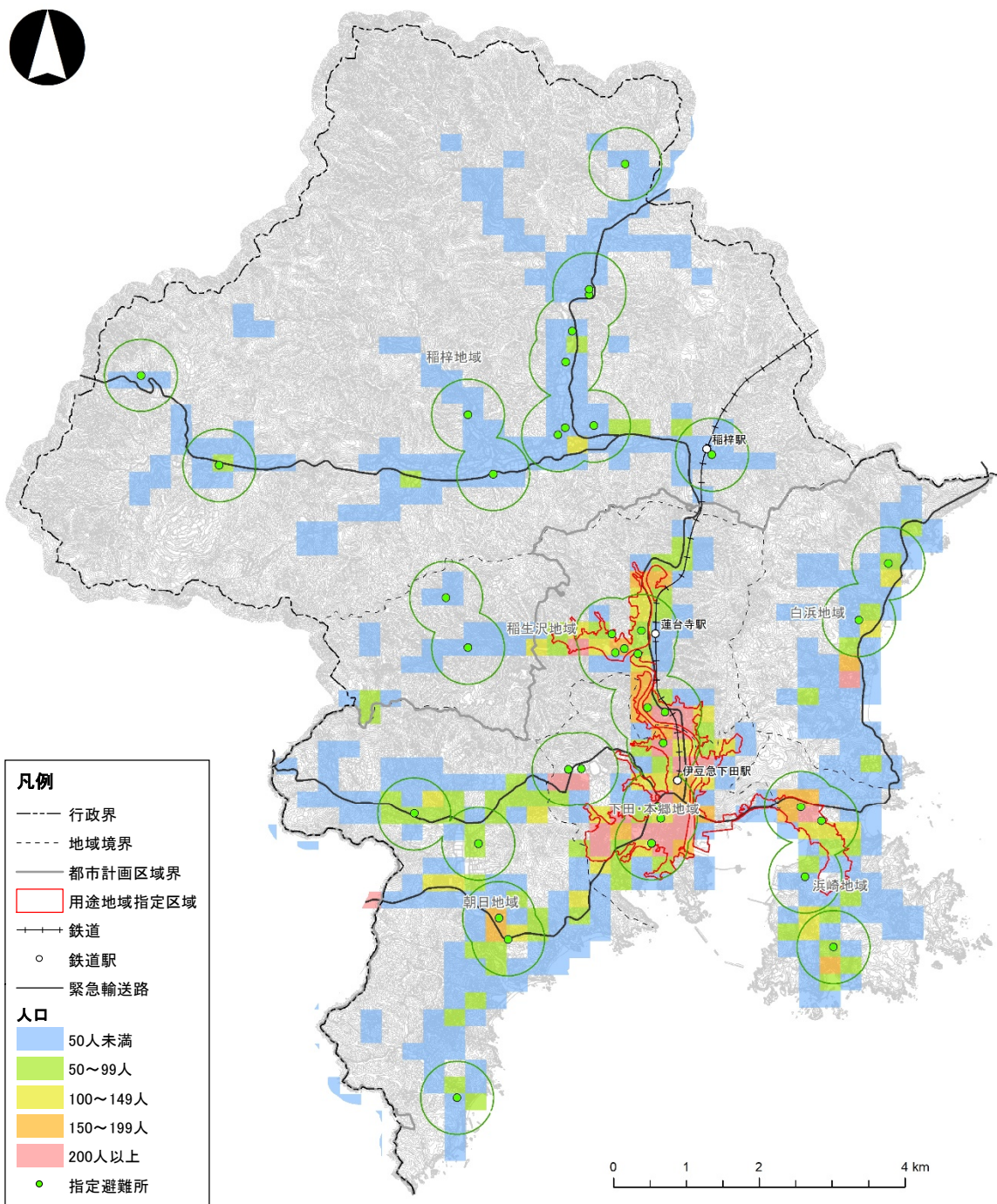
「市町村における津波避難計画策定指針（総務省消防庁）」における避難距離に関する記載「避難できる限界の距離は最長でも500m程度とする」を参考に、指定避難所から500m圏域とした。



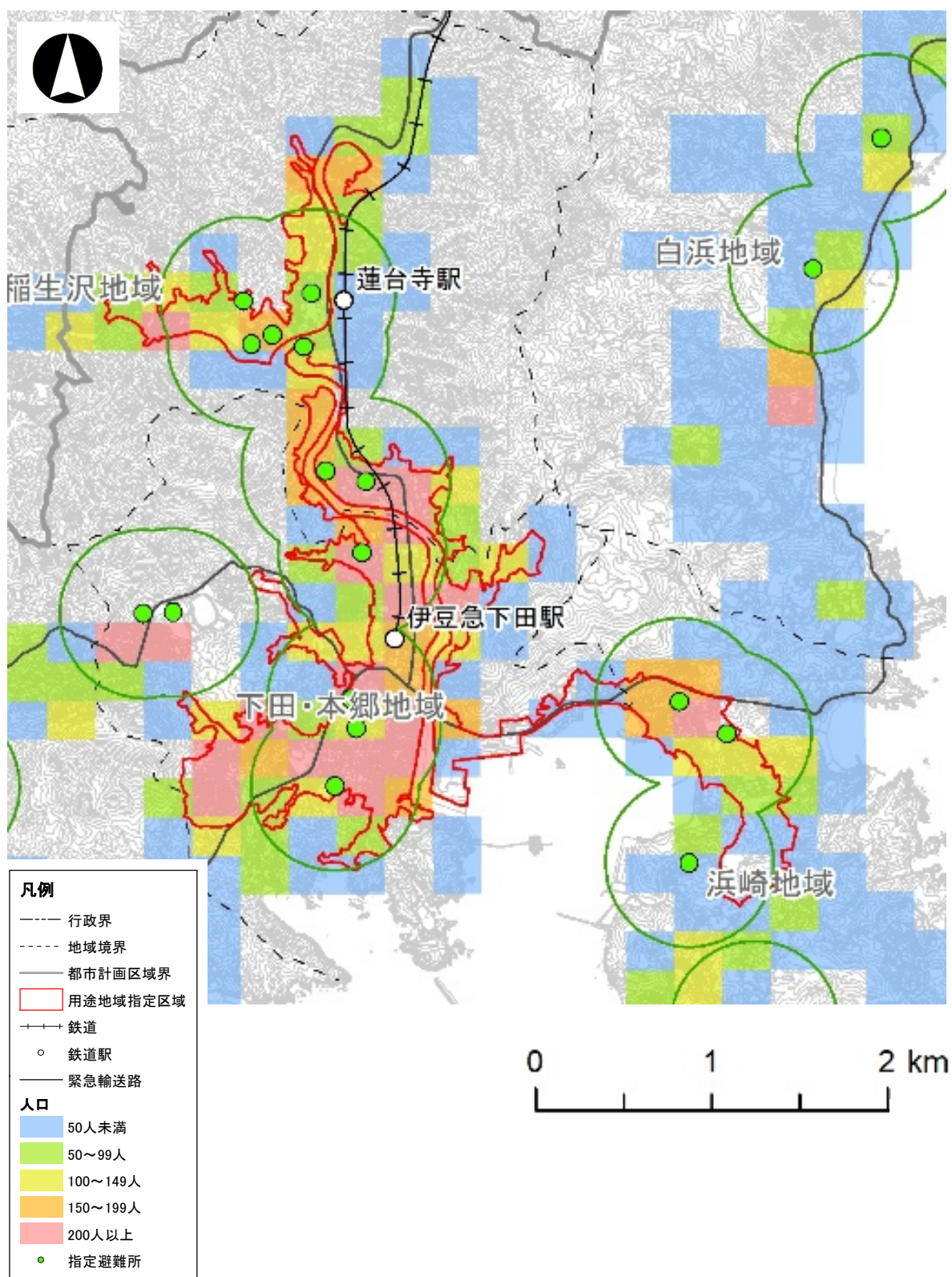
図一 避難施設（指定避難所等）（全市）
（資料：地域防災計画）



図一 避難施設（指定避難所等）（用途地域）
（資料：地域防災計画）

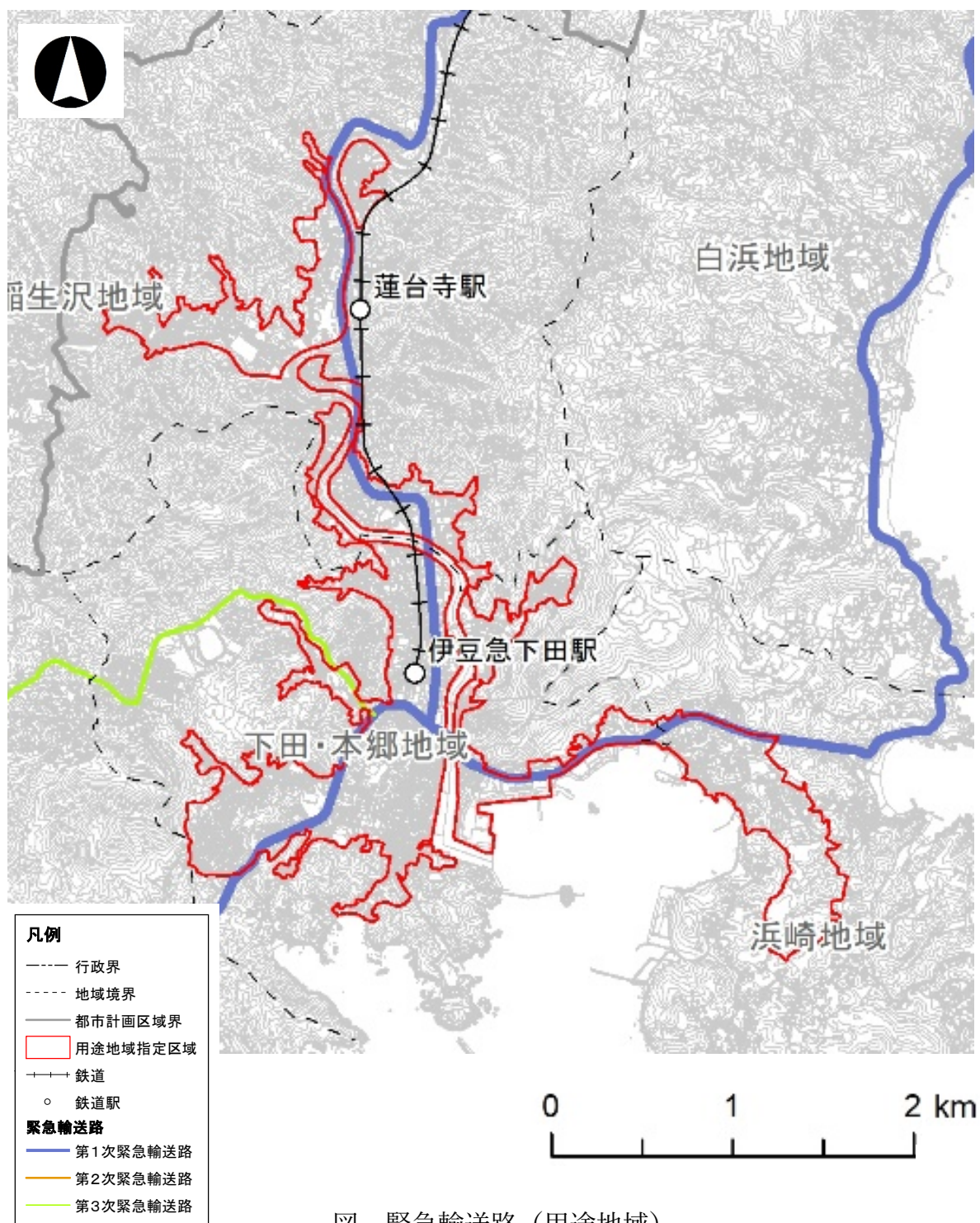


図－指定避難所圏域（500m）（全市）



図－指定避難所圏域（500m）（用途地域）



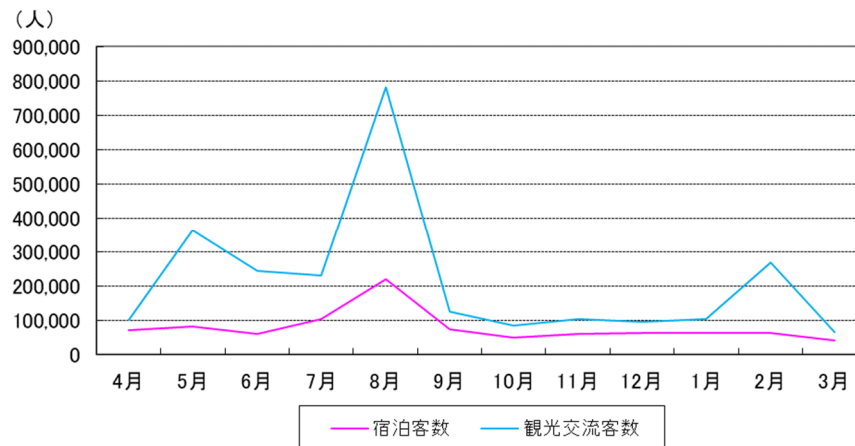


図一 緊急輸送路（用途地域）

2-5 観光客における避難対策の現状

(1) 宿泊客数及び観光入込客数

本市における宿泊数及び観光交流客数についてみると、年間では宿泊客数は約100万人、観光交流客数は約270万人と多くの観光客の来訪が見られる。特に、夏場の8月には海水浴場の開設等により観光客の来訪はピークとなり、宿泊客数は約22万人、観光交流客数は約78万人となっている。



図－令和元（2019）年度における宿泊客数及び観光交流客数

(2) 主要観光施設における観光客数

主要観光施設における観光客数について観光施設の分類ごとにみると、「学ぶ（主に観光施設）」における観光客数は約45万人、「遊ぶ（主に海水浴場）」における観光客数は約41万人、「触れ合う（主にイベント）」における観光客数は約74万人となっている。

また、海水浴場や中心市街地沿岸部における観光施設等の観光客数が多く、観光客の津波避難に対する対応は特に重要となる。

表－主要観光地における観光客数

観光地の分類	観光地名称	令和元年度観光客数(人)
学ぶ	伊豆クルーズ	72,681
	下田ローブウェイ	78,900
	豆州下田郷土資料館	44,775
	了仙寺宝物館	27,866
	下田海中水族館	191,114
	ベイ・ステージ下田ハーバーミュージアム	4,118
	柿・みかん狩り	100
	宝福寺お吉記念館	20,393
遊ぶ	上原美術館	14,889
	白浜中央海水浴場	8,406
	白浜大浜海水浴場	247,500
	外浦海水浴場	61,832
	九十浜海水浴場	27,273
	鍋田浜海水浴場	6,322
	多々戸浜海水浴場	16,190
	入田浜海水浴場	23,255
	吉佐美大浜海水浴場	11,650
	田牛海水浴場	10,882
触れ合う	水仙ツデーマーチ	514
	下田太鼓まつり	150,000
	黒船祭	217,400
	あじさい祭	154,200
	アロエの花まつり	1,500
	水仙まつり	174,000
	ビュッシャー	9,000
	白浜海の祭典	14,000
	香りの花まつり	17,000
	マリンフェスタ下田	1,500

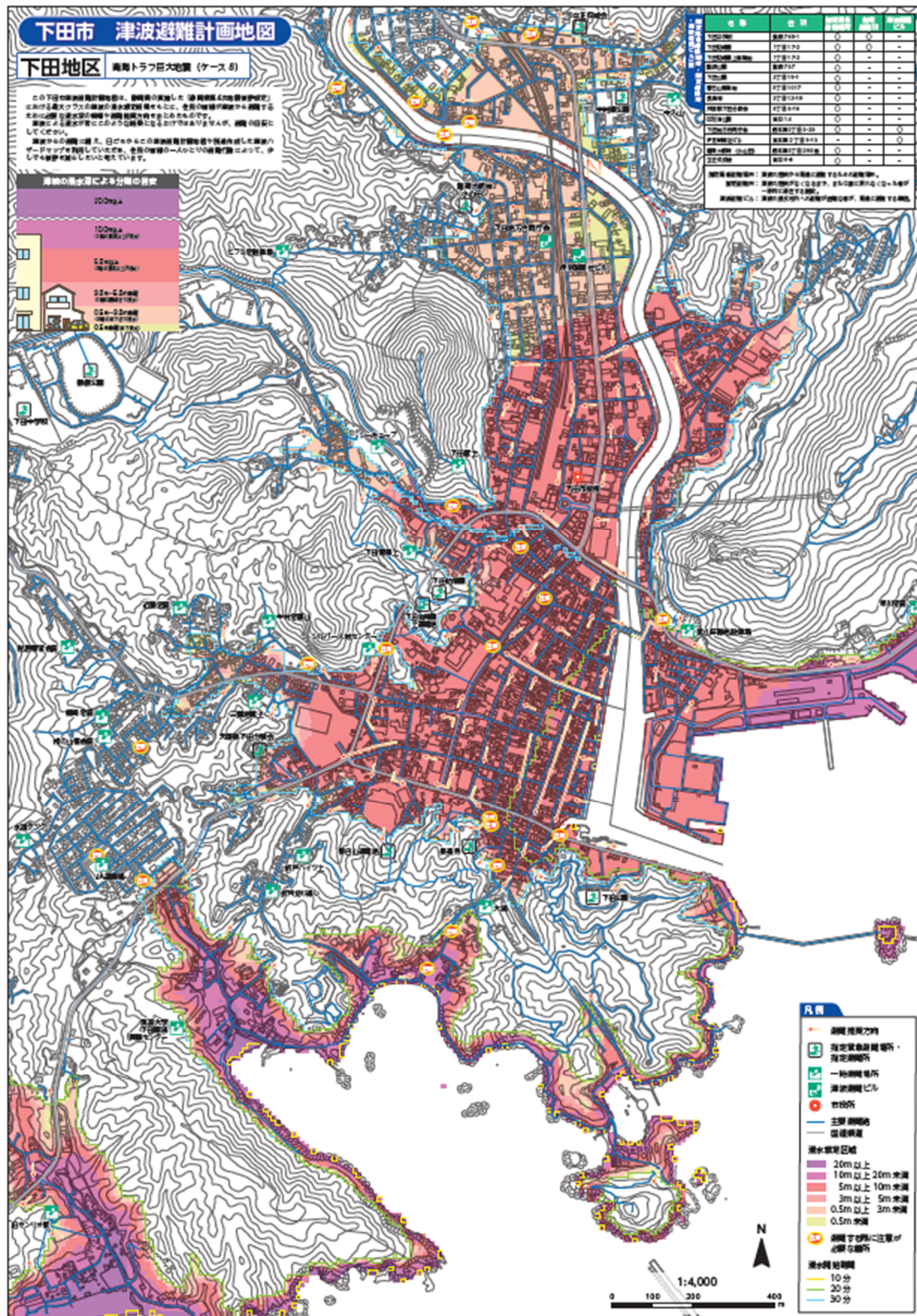
(3) 観光客における津波避難シミュレーション

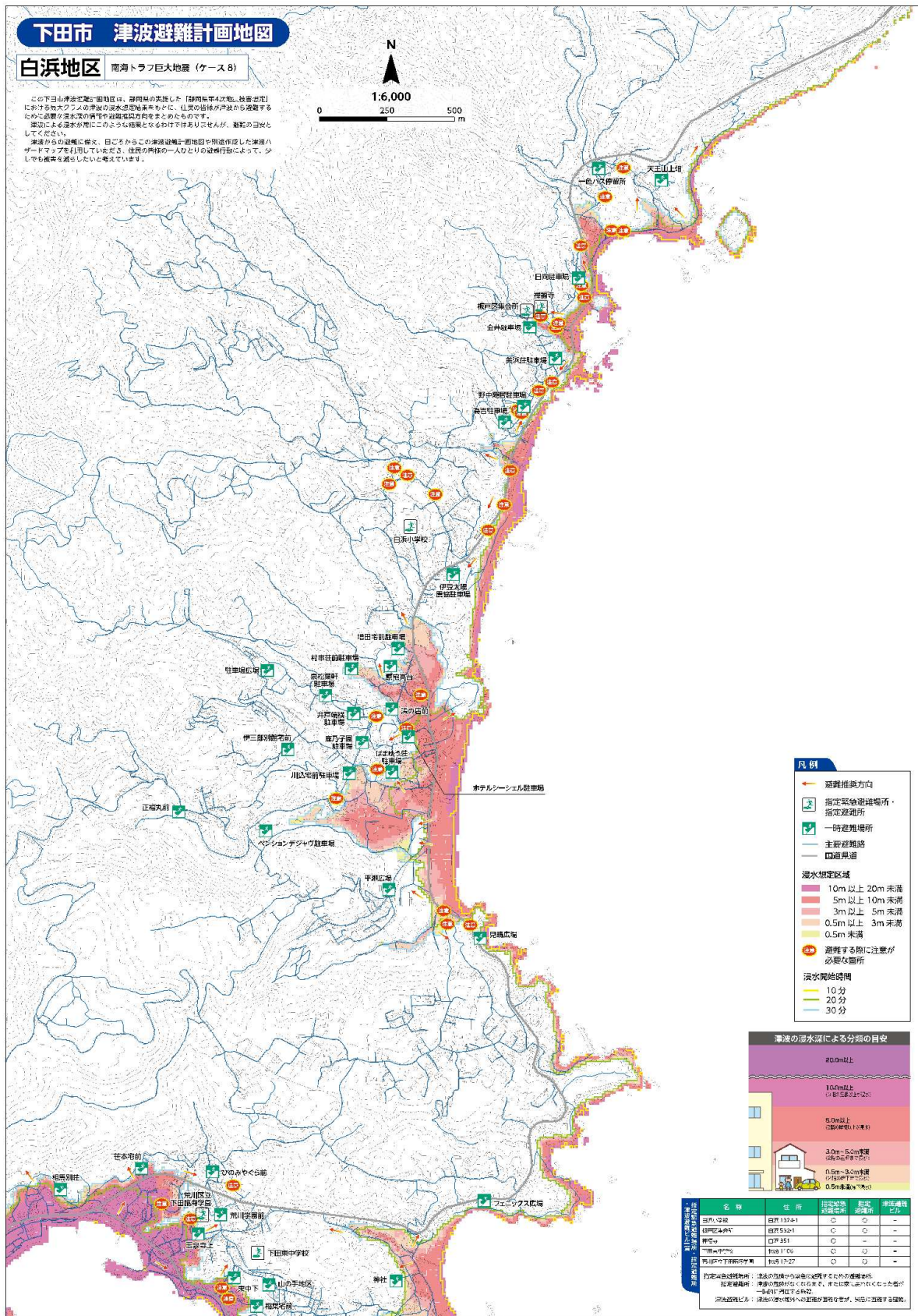
観光客における津波避難シミュレーションにおいて、津波避難対策後（防災訓練、防災教育等の効果及び避難路の整備、避難看板等の設置）では、観光客は吉佐美地区の100名を除き避難が可能となっているが、このシミュレーションは、あくまで津波避難対策を実施し、発災後すぐに観光客が的確な避難行動をとった際のものであり、観光客の中には、発災時に避難場所が分からない者や外国からの観光客で日本語に不慣れな者等もいることが想定されることから、観光客に対する津波避難対策が求められる。

表－津波避難シミュレーション結果（対策後：南海トラフ巨大地震（ケース8））
（資料：下田市津波避難計画）

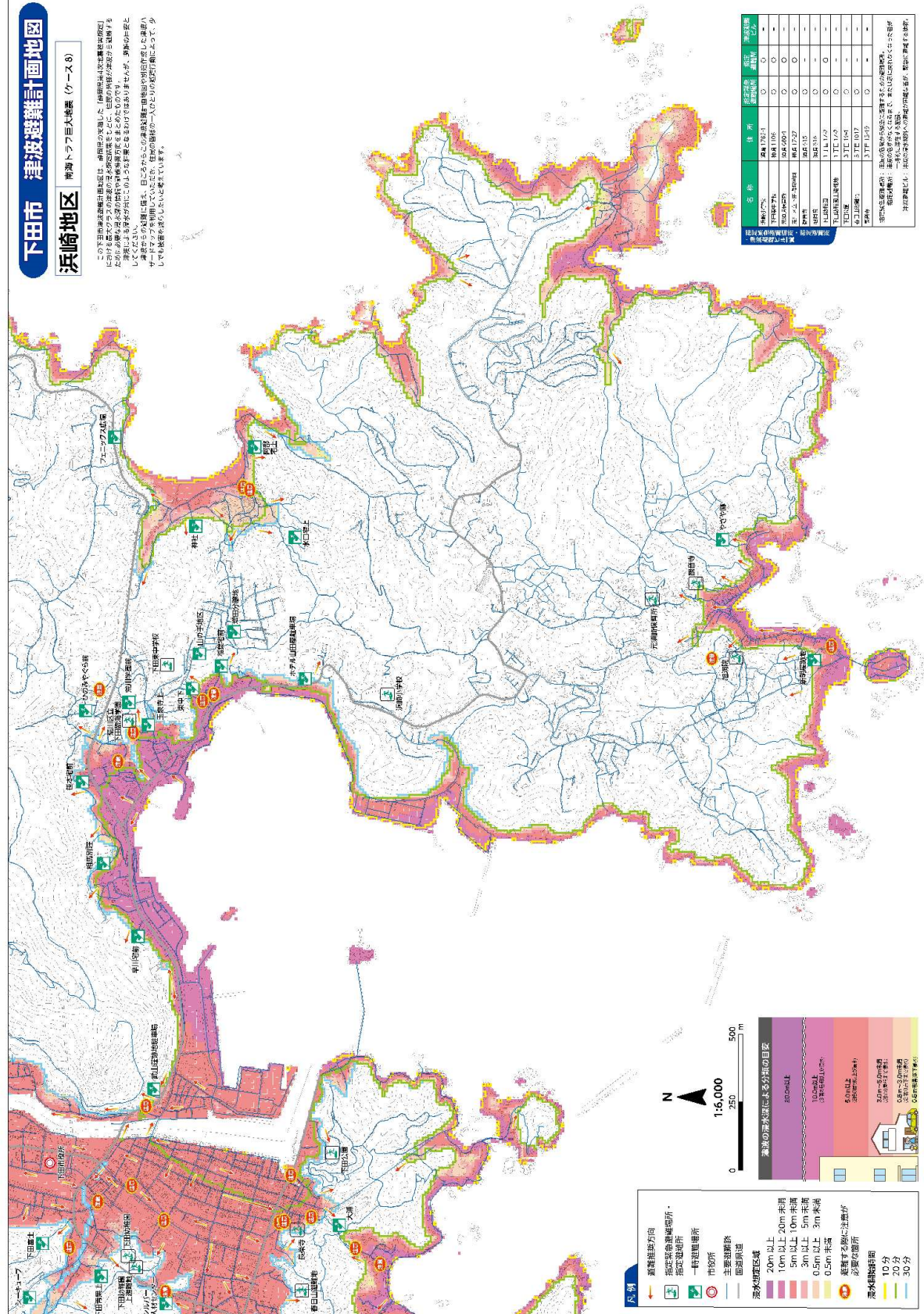
行政区名称	健常者（人）			要支援者（人）			観光客（人）			合計（人）		
	域外 避難	避難 不可	小計	域外 避難	避難 不可	小計	域外 避難	避難 不可	小計	域外 避難	避難 不可	小計
一丁目	337	0	337	426	0	426	14	0	14	777	0	777
二丁目	235	0	235	304	0	304	0	0	0	539	0	539
三丁目	194	0	194	255	0	255	141	0	141	590	0	590
四丁目	153	0	153	146	0	146	0	0	0	299	0	299
五丁目	141	0	141	136	0	136	247	0	247	523	0	523
六丁目	187	0	187	154	0	154	13	0	13	354	0	354
敷根	72	0	72	69	0	69	0	0	0	141	0	141
東本郷一丁目	115	0	115	126	0	126	32	0	32	273	0	273
東本郷二丁目	79	0	79	101	0	101	0	0	0	180	0	180
西本郷一丁目	142	0	142	139	0	139	114	0	114	395	0	395
西本郷二丁目	166	0	166	176	0	176	0	0	0	342	0	342
西本郷三丁目	5	0	5	5	0	5	0	0	0	10	0	10
中	498	0	498	392	0	392	46	0	46	936	0	936
吉佐美	806	0	806	585	2	587	3,088	100	3,188	4,479	102	4,581
田牛	31	0	31	35	0	35	564	0	564	630	0	630
武ガ浜	88	0	88	93	0	93	182	0	182	363	0	363
柿崎	183	0	183	153	0	153	400	0	400	736	0	736
須崎	118	0	118	110	0	110	660	0	660	887	0	887
外浦	99	0	99	118	0	118	1,878	0	1,878	2,095	0	2,095
原田	164	0	164	137	0	137	6,699	0	6,699	7,000	0	7,000
長田	1	0	1	1	0	1	400	0	400	402	0	402
板戸	41	0	41	63	0	63	33	0	33	137	0	137
合計	3,853	0	3,853	3,724	2	3,726	14,511	100	14,611	22,089	102	22,191

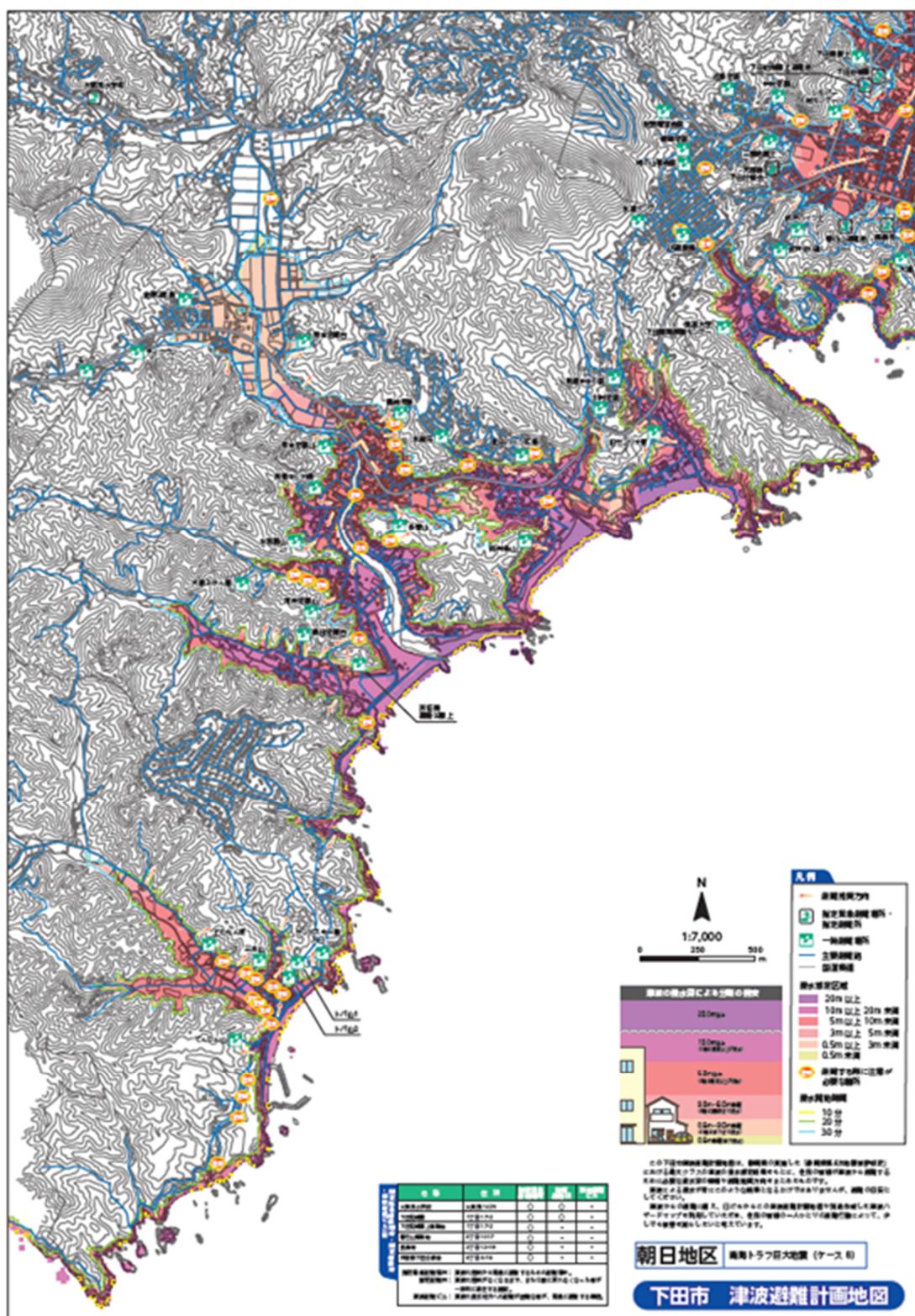
【津波避難計画地図（出典：下田市津波避難計画）】





区 浜崎地区

[illegible]

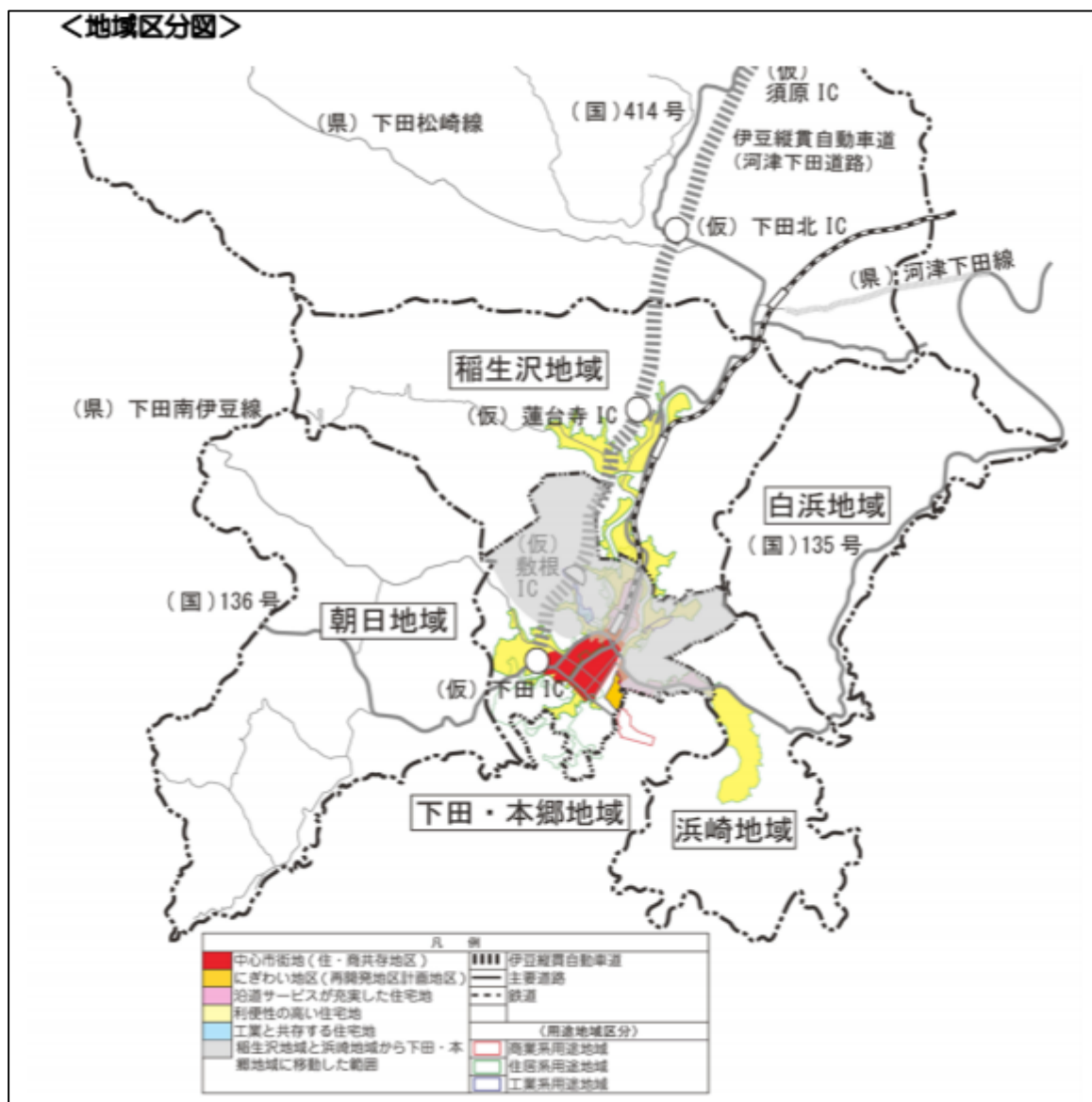


（４） 観光客における津波避難対策の現状

本市では、観光客等の避難訓練の充実・実施等における取組を推進しており、今後は観光地における避難対策マニュアルの策定等も進めていく予定であるが、観光客に特化した避難対策については、更なる強化が求められる。特に、観光客を受け入れる施設の確保や明確化、避難施設における観光客用の備蓄品（水・食料等）の確保については、積極的な取組の推進が求められる。その他、本市は発災後に他地域への交通網が寸断される可能性があるが、その際の観光客の帰宅支援のあり方についても検討を進める必要がある。

2-6 地域別にみた災害リスク

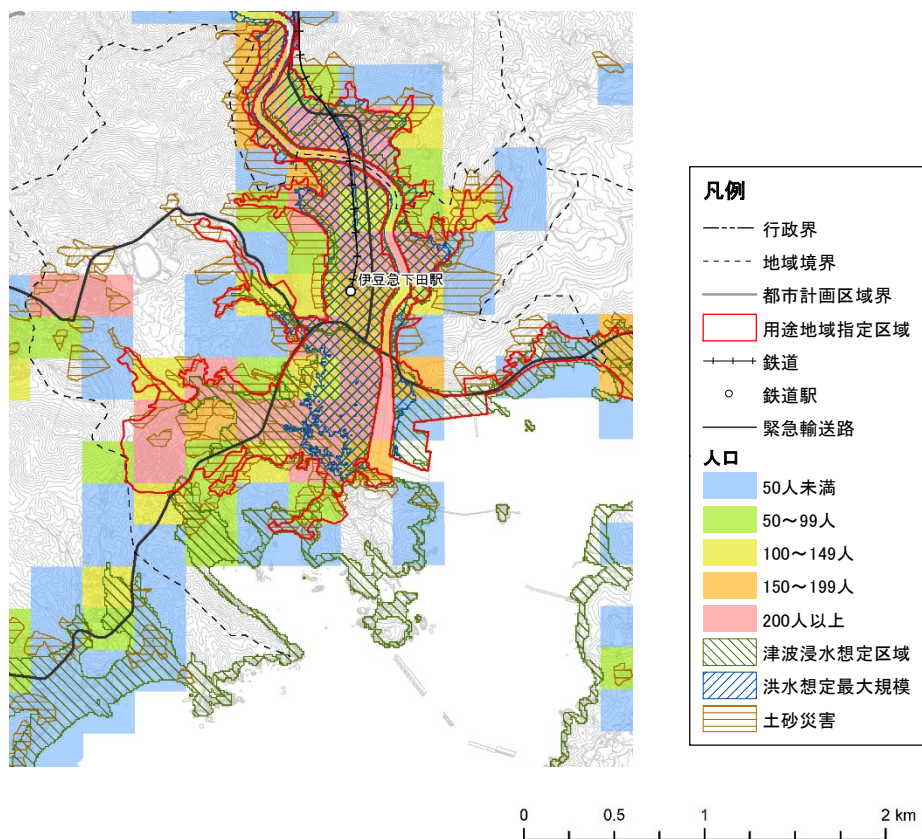
下田市都市計画マスタープラン地域別構想における地域区分より、各地域における災害リスクを以下に整理する。



図ー地域区分図（資料：下田市都市計画マスタープラン）

(1) 下田・本郷地域

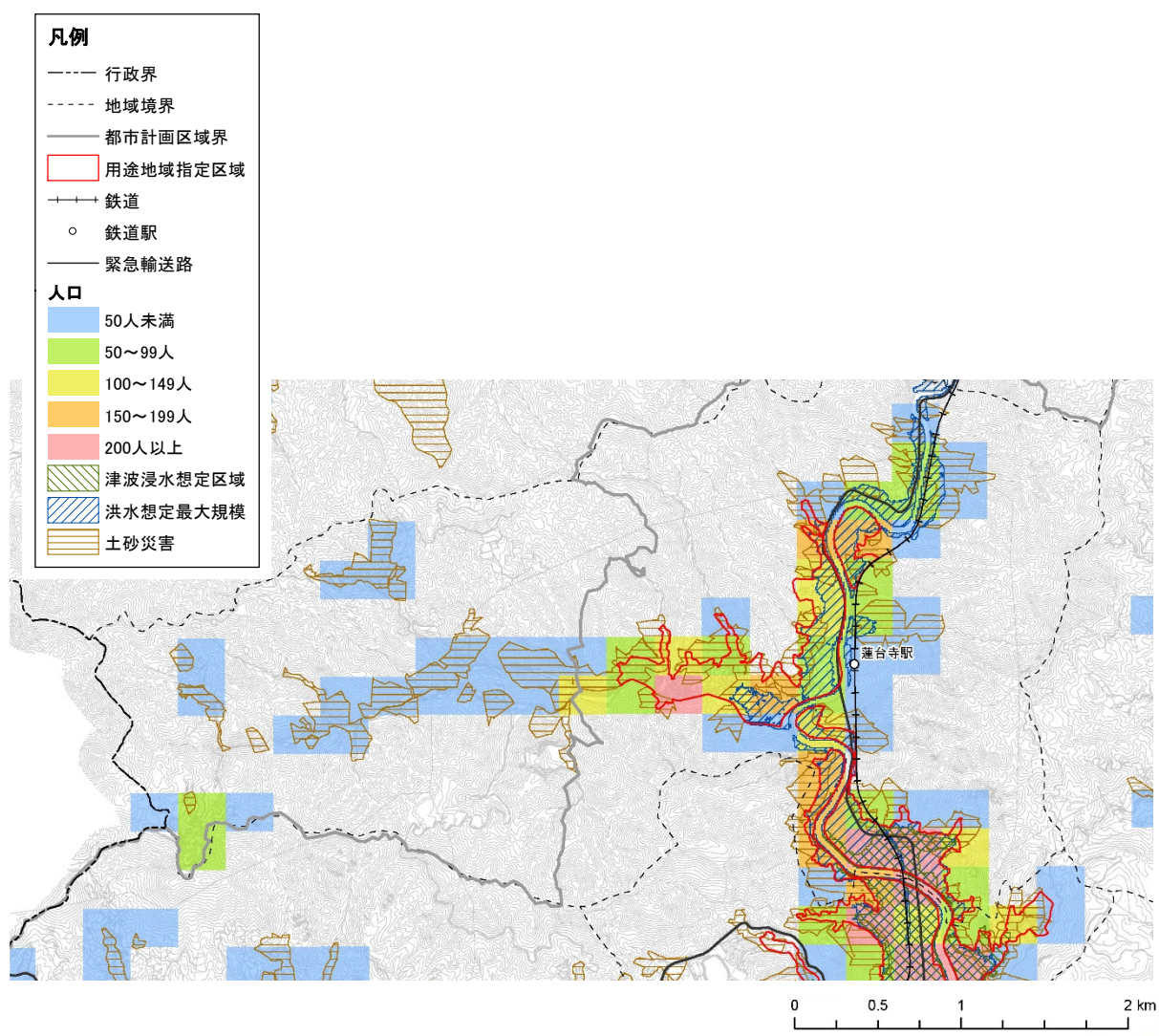
下田・本郷地域における災害リスクについてみると、人口が集中する中心部沿岸部が津波や稲生沢川の氾濫により浸水すると想定されているほか、市街地（用途地域指定区域）の外縁部に土砂災害の危険区域が多数指定されるなど、甚大な被害が発生する危険性が高い。



図－下田・本郷地域における災害リスク重ね合わせ図

(2) 稲生沢地域

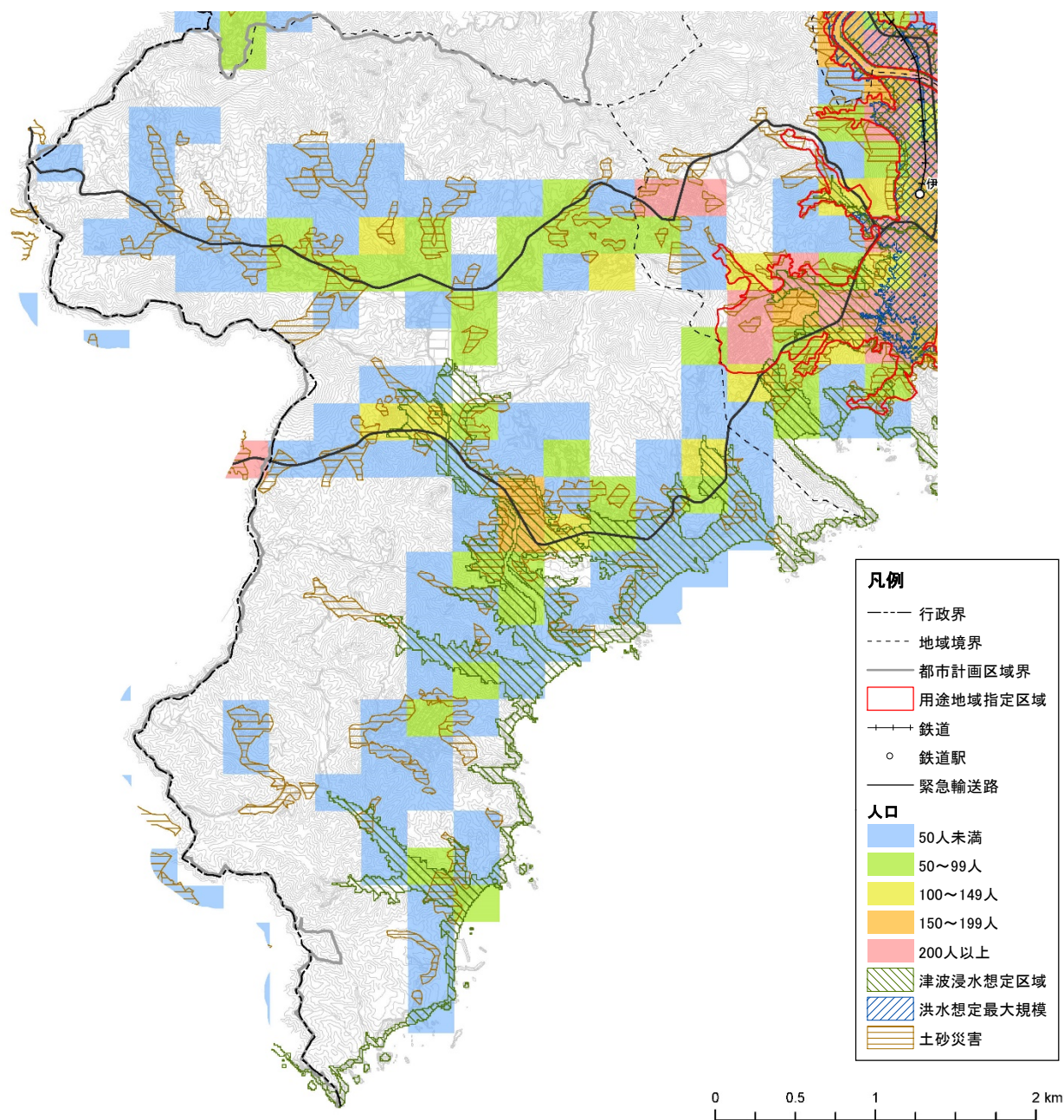
稲生沢地域における災害リスクについてみると、稲生沢川の氾濫により流域の平野部の広い範囲が浸水すると想定されている。また、本地域の南部は津波による浸水の可能性もある。土砂災害の危険区域も、稲生沢川流域や用途地域指定区域の外縁部、西部の山間部に多数指定されており、土砂災害が発生する危険性も高く、孤立化が懸念される集落も存在する。



図－稲生沢地域における災害リスク重ね合わせ図

(3) 朝日地域

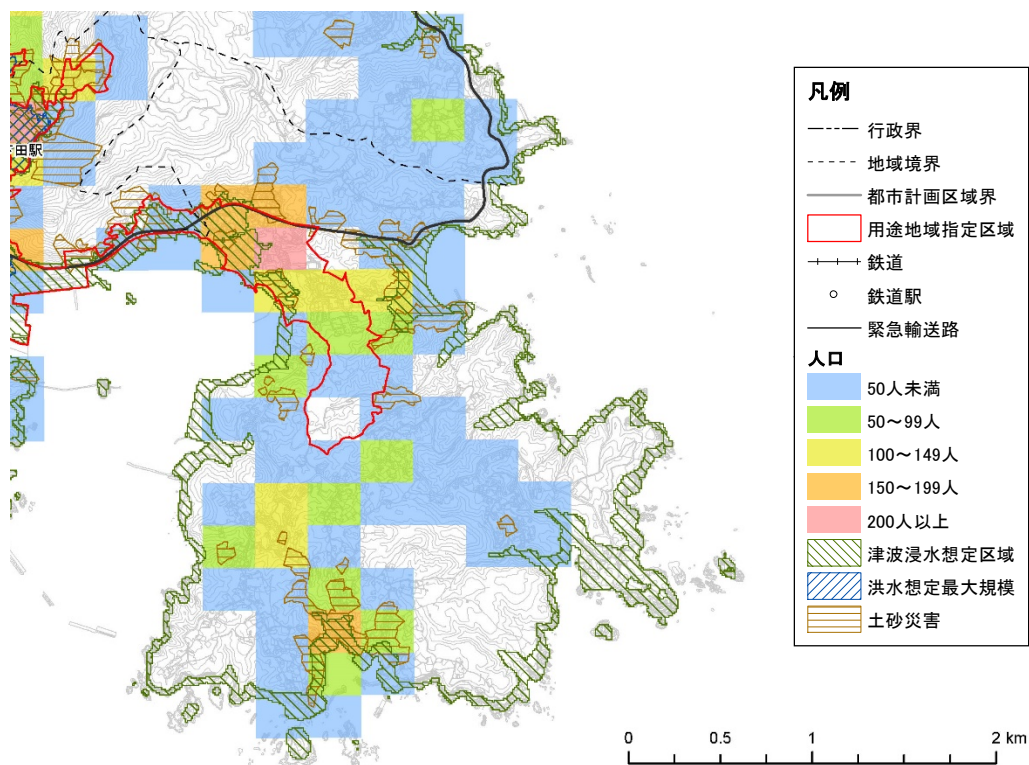
朝日地域における災害リスクについてみると、本地域南部の沿岸部や大賀茂川流域の平野部が津波や大雨により浸水すると想定されている。また、本地域北部の山間部を中心に、土砂災害の危険区域が多数指定されており、土砂災害が発生する危険性も高い。



図－朝日地域における災害リスク重ね合わせ図

(4) 浜崎地域

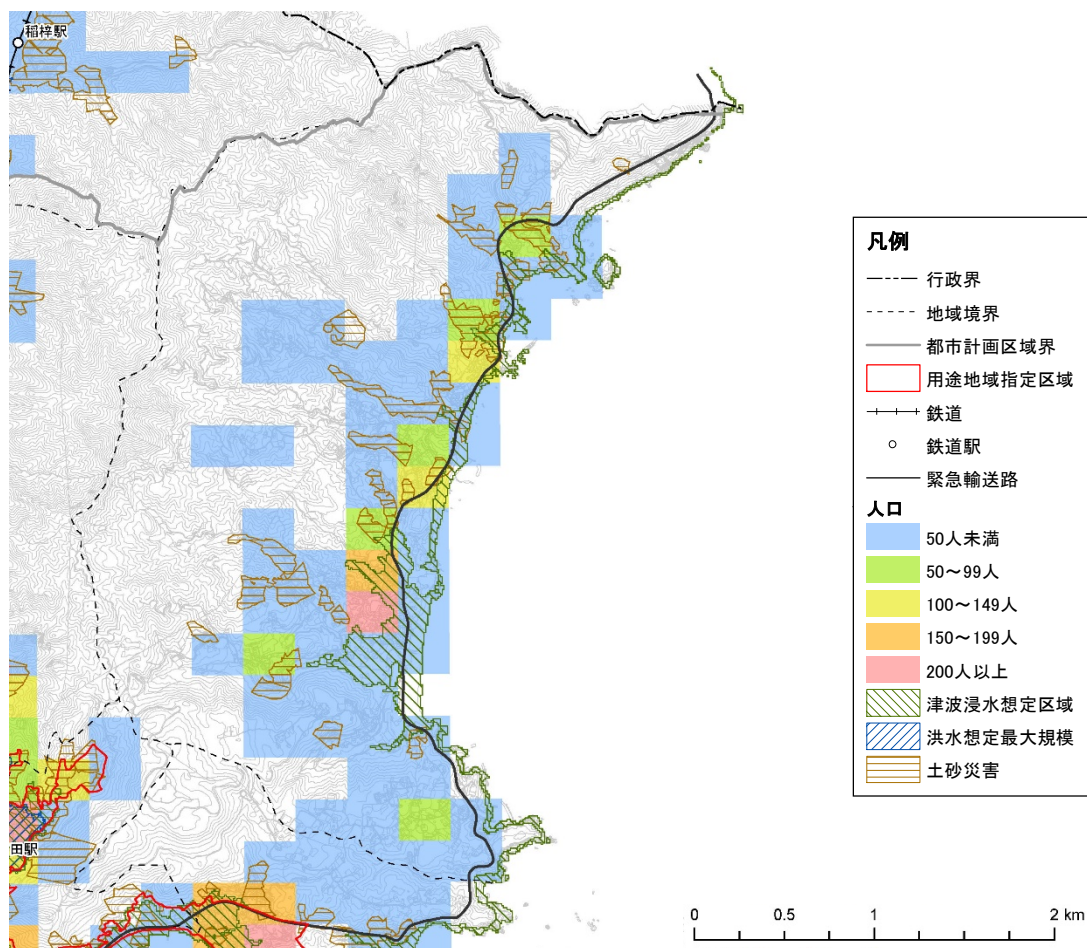
浜崎地域における災害リスクについてみると、沿岸部の災害リスクが高く、津波による浸水や土砂災害が発生する危険性が高い。



図－浜崎地域における災害リスク重ね合わせ図

(5) 白浜地域

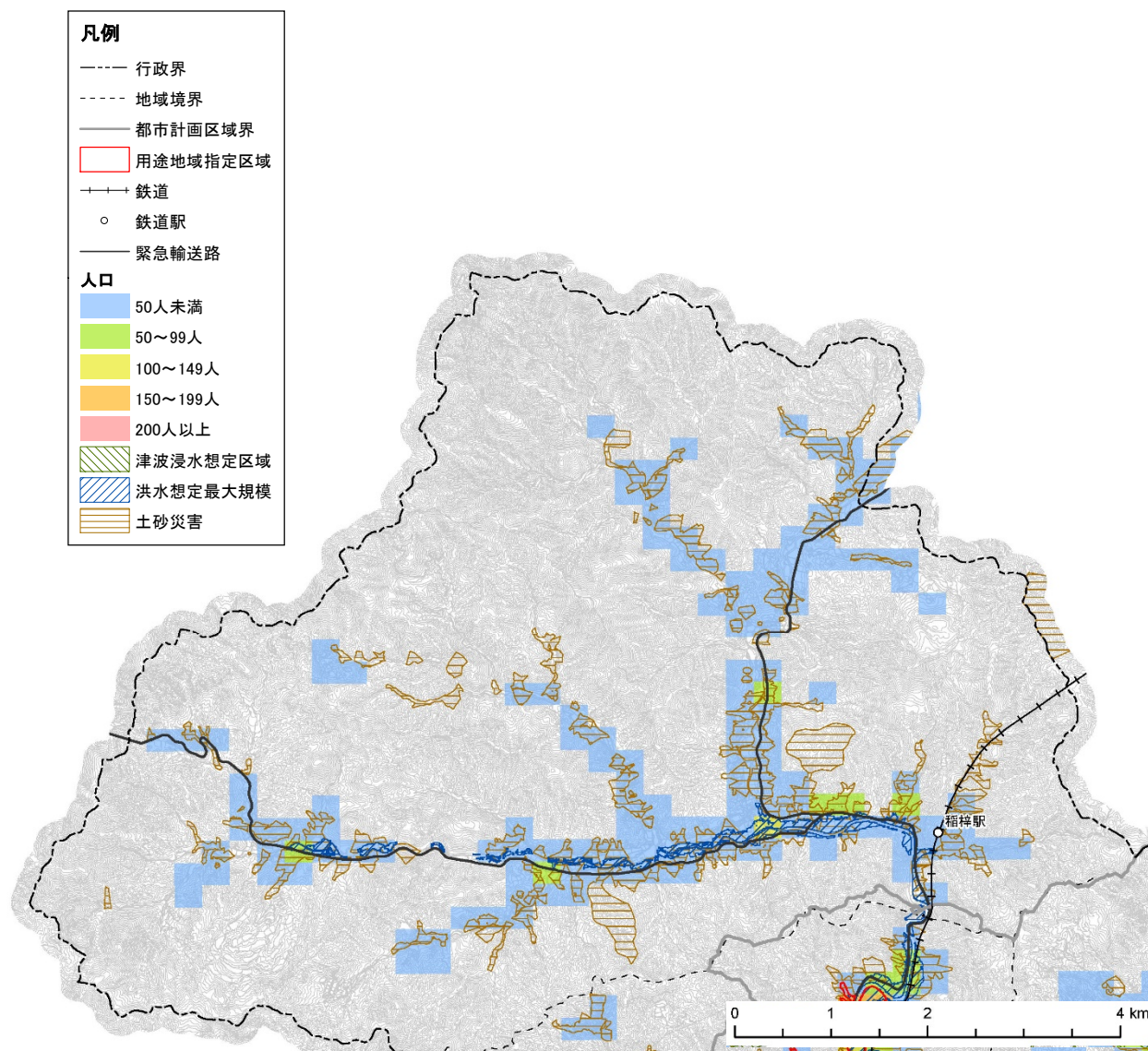
白浜地域における災害リスクについてみると、沿岸部が津波により浸水すると想定されている。また、沿岸部の市街地の外周に沿って土砂災害の危険区域が多数指定されており、土砂災害が発生する危険性も高い。



図－白浜地域における災害リスク重ね合わせ図

(6) 稲梓地域

稲梓地域における災害リスクについてみると、稲生沢川流域の平野部の広い範囲が、稲生沢川の氾濫により浸水すると想定されている。また、中小の河川に沿って土砂災害の危険区域が多数指定されており、土砂災害が発生する危険性が非常に高く、孤立化が懸念される集落も存在する。



図－稲梓地域における災害リスク重ね合わせ図